

2018 年度 修士論文

性別違和感を抱く人と
自閉症スペクトラム障害との関連
—ジェンダーアイデンティティに関する
TEM を用いた検討—

白百合女子大学大学院 文学研究科

発達心理学専攻

脇 優花

目次

第一章 序論	2
第一節 ジェンダーアイデンティティ	2
第二節 性別違和感	6
第三節 問題と目的	11
 第二章 研究Ⅰ	 13
第一節 方法	13
第二節 結果	15
第三節 考察	18
第四節 研究Ⅰの総合考察と研究Ⅱで明らかにすべき問題と目的	24
 第三章 研究Ⅱ	 25
第一節 方法	25
第二節 結果	27
【1.研究協力者 A さん(ASD 群)】	28
【2.研究協力者 B さん(非 ASD 群)】	34
【3.研究協力者 A と研究協力者 B の等至点設定の内容と比較】	43
第三節 考察	45
 第四章 総括	 51
第一節 研究Ⅰおよび研究Ⅱの総合考察	51
第二節 本研究の課題点と今後の展望	54
 文献	 57
付録	63
要約	92
謝辞	95

第一章 序論

人間の性には5つの側面がある。出生時に医師によって判断され区別される解剖学および生物学的「性」(身体的性/sex), 身体的な性に寄らず社会的・文化的文脈の中での「性」(社会・文化的性/性役割/gender), ファッションや振る舞い・態度などで自分らしさが自発的に表現された「性」(性表現/gender expression), 他人からの強制や自らの自由意思ですら変えることが困難な自身の性の認識(性同一性/性自認/gender identity), 恋愛や性愛の対象となる「性」(性的指向/sexual orientation)である。一般に, 性同一性(以下, ジェンダーアイデンティティとする)は自身の生物学的性と一致している場合が多い。Money(1975)は, 臨界期で確立したジェンダーアイデンティティはその後変わらないと述べた。そしてKohlberg(1966)はジェンダーアイデンティティが芽生えればスキーマに沿って性役割を習得するとした。一般に, 自己のジェンダーアイデンティティと生物学的性は一致している場合が多い。この一致している人のことを「シスジェンダー(Cisgender)」と呼ぶ。一方, これらが一致していない場合は「性別違和感」という概念(疾患名)で表される。古くは「性同一性障害」と言われており, 現在でもこちらの名称の方が広く一般には知られている状況にある。以下, ジェンダーアイデンティティという性の定義の一側面と, セクシュアル・マイノリティという概念の一側面である性別違和感について取り上げ, 論じていくこととする。

第一節 ジェンダーアイデンティティ

(1)ジェンダーアイデンティティとは

ジェンダーアイデンティティの定義として, 代表的な2つの概念を挙げる。一つは「自分が所属している性別について知っているという感覚のこと。すなわち『私は男性である』もしくは『私は女性である』という認識のこと(Stoller,1964)」, もう一つは「男性あるいは女性, あるいはそのどちらとも規定されないものとしての個性の統一性, 一貫性, 持続性(Money,1965)」という定義である。後者について佐々木(2006)は, 「たとえば, ある個人における10年前も男性であり, 今も男性であり, 50年後も男性であろうと思うといった, 時間軸的な一貫性の感覚のことでもあり, また, 自分を男性だと思い, 他者も自分を男性と思っているだろうと思い, そして男性として現実の社会の中で生きているといっ

た、他者も社会も含めた統一的な感覚のことでもある」と詳細に定義している。内分泌学の専門家として性科学の研究をしていた Money は、1950 年代からインターセックス(半陰陽)に関する研究を行った。そこで彼はジェンダーアイデンティティを「話し言葉を習得するのとはほとんど同じ方法で習得される(Money,1975)」ものだと考え、ジェンダーアイデンティティの「臨界期(生後 18 ヶ月～24 ヶ月)説」を提起し、その時期に割り当てられた性別は不可逆的なものであると主張した。Money はこのジェンダーアイデンティティの「臨界期」の重要性を強く主張しており、「性自認が分化をするこの段階期では、染色体やホルモンや性器や個体がどのような状態にあらうとも、社会的圧力のほうがジェンダーアイデンティティを決定する影響因として大きい(Money,1975)」と述べている。

(2)精神分析学におけるジェンダーアイデンティティ

心理学、とりわけ精神分析学において、性というテーマは切っても切り離せない関係にある。Freud は性対象倒錯(同性愛を含む)や、フェティシズムなどについて述べた「性的な逸脱」、成人の性器性欲とは明確に区別して幼児性欲について論じた「幼児の性愛」、性的な快感や、性やエロスに結びついた心的エネルギーであるリビドーについて論じた「思春期における変化」の三篇から成る「性理論三篇」(1905)を書いた。この書における第三編第四節の「男性と女性の分化」において Freud は、「男性的」と「女性的」という概念は、一般的にはごく明白なものと考えられているが、学問的には非常に混乱した概念であり、少なくとも三つの意味で考えられると述べている。第一に能動性と受動性の対立という意味、第二に生物学的な意味、第三に社会学的な意味である。ただし、生物学的な男性の能動性(リビドー)や攻撃性が雌(女性)に現れることもあるし、心理学的な意味でも生物学的な意味でも、純粋な男性や女性というものは存在しないとしている。すなわち、個々の人間は何れも自分の性と生物学的な異性の特徴を兼ね合わせて示しているのであり、能動性と受動性が結合した形で存在することに加え、そうした心的な性格の特徴は生物学的な特性の特徴に依存する場合もしない場合もあるものであると論じた。言い換えれば、自己の内面の性は生物学的性に依存するものではなく、男性性と女性性を併せ持つものであると言えるであろう。Freud(1925)は「性器の解剖学的な相違は宿命である」としながらも、ジェンダーアイデンティティや社会・文化的性などを含む内的な性は男女に明確に分化することはできないと述べたのである。

精神分析理論において、ジェンダーアイデンティティは家族力動を検討材料に入れたも

のを中心として、男児は父親と、女児は母親との同一化を通じてジェンダーアイデンティティを発達させていく、というのが基本的な捉え方である。Freud(1925)は、性の発達の男性と女性との差異は、性器の解剖学的相違およびこれと結びついた心的状況の一つの明白な帰結であって、これは実現した去勢とただ脅かしだけにとどまっている去勢との差異に対応している、と述べている。すなわち男根期における去勢不安とペニス羨望がジェンダーアイデンティティを確立させるとした。

(3)社会学的な観点から見たジェンダーアイデンティティ

社会的学習理論において、Mischel(1966,1970)や Bandure(1977)が「分化強化」や「モデリング」の理論を提唱してきたが、これに基づいて Perry & Bussey(1979)は子どもは多くの男性や女性、男の子や女の子を観察することで、女性はよく行いが男性がめったに行わない行動あるいはその逆の行動がどんな行動であるのかを知り、男性に適切な、あるいは女性にふさわしい行動を学んでいくと述べた。すなわち、自分の性別に典型的だとその子どもがみなした行動をモデリングする。そして、何が適切なのかを判断するにあたって、親などが適切な性役割をとれば報酬を、不適切であれば罰を与えることで、分化強化が促され、それに伴いジェンダーアイデンティティが確立すると考えた。認知発達理論では、Kohlberg(1966)の説明によると、子どもは時間が経過したとしても、事態(外見など)が変化したとしても性別は変わらないという恒常性を理解するようになってから、自己の性別を同一視し、それに一致した性役割取り込みを行うことでジェンダーアイデンティティを発達させていくとした。このように社会学的な観点からジェンダーアイデンティティについて捉える考え方は、社会や環境からの圧力によっていわば「受動的につくられていく」ものであるといえるだろう。しかし、筆者はこれらはジェンダーアイデンティティではなく「社会・文化的性」および「性役割」であろうと考える。佐々木・尾崎(2007)はこれについて、「これまでのジェンダーアイデンティティに関する研究では、社会的性役割を構成概念としてジェンダーアイデンティティを測定してきたため、ステレオタイプな社会的性役割を志向していればジェンダーアイデンティティが高いとみなしてきた」「こうした測定法はステレオタイプな”性役割”への”志向性”を示すものであり、”ある性別”に対する”アイデンティティ”を測定しているわけではない」としている。佐々木の指摘からも言えるように、性役割とジェンダーアイデンティティの定義は明確に分けられる必要があるだろう。

(4) ジェンダーアイデンティティとアイデンティティ

アイデンティティとは精神分析的見地から Erikson が提起した概念で、「私は唯一無二の存在であり、過去も現在も未来も私である」という感覚・自信のことをさす (Erikson, 1959)。社会心理学的なアイデンティティ概念使用について Erikson (1968) は、本質が捉えられていないと苦言を呈している。先に述べた社会心理学におけるジェンダーアイデンティティの概念はまさにそれであろう。佐々木・尾崎 (2007) は「ジェンダーアイデンティティをある性別に対する社会的役割や人格特性、意識的自己像という側面からのみ捉えるのではなく、ある性別に対する統一性、一貫性、持続性という側面から捉える必要がある」と述べている。これは前述した Money (1965) の定義と同一である。

Erikson (1950, 1959, 1968) の記述から自我同一性の定義に関わる文章を抽出した谷 (2001) は、同一性の感覚において重要であると考えられるのは自己の不変性および時間的連続性についての感覚を意味する「自己斉一性・連続性」と、他者から見られているであろう自分自身が、本来の自分自身と一致しているという感覚を意味する「対他的同一性」、自分が目指すべきもの、望んでいるものが明確に意識されているという感覚を意味する「対自的同一性」、現実の社会の中で自分自身を意味づけられるという、自分と社会との適応的な結びつきの感覚を意味する「心理社会的同一性」の4つの下位概念を設定した。佐々木・尾崎 (2007) はこの谷 (2001) の作った多次元自我同一性尺度 (Multidimensional Ego Identity Scale: MEIS) を援用して、新しいジェンダーアイデンティティ尺度を作成した。そこではジェンダーアイデンティティを「斉一性・連続性をもった主観的な自分の性別が、まわりからみられている社会的な自分の性別と一致するという感覚」と定義した。本研究でも佐々木・尾崎 (2007) のジェンダーアイデンティティ尺度を用いているため、本研究におけるジェンダーアイデンティティの定義もこれに倣うこととする。

(5) ジェンダーアイデンティティと性的指向

性的指向 (性指向) とは「性的魅力を感じる対象の性別が何かである (針間, 2000)」。

Erikson (1959) は性的同一性対両性的拡散について、これを異性との性器的親密さによってつくられるものだと述べている。鏑 (2002) は「男が真に男であることは、異性としての女に出会ったときであり、女が真に女となるということは、異性としての男に出会ったときである」と異性愛を前提としてジェンダーアイデンティティが作られるとしている。しかし、同性に性的指向を持つ人は、同性に恋愛や性愛に基づく魅力を感じながらもジェン

ダーアイデンティティが確立していないわけではないだろう。例えば、女性を性的指向とする女性は、身体的性別と一致する女性としてのジェンダーアイデンティティがあるかもしれないし、性的指向と対する男性としてのジェンダーアイデンティティがあるかもしれない。「かつては性指向と性同一性が混同して論じられたこともあったが、現在ではそれぞれ別個の概念と理解されている(針間,1999)」とあるように、ジェンダーアイデンティティと性的指向も別個の概念として明確に定義されなければならない。とはいえ、性的指向はジェンダーアイデンティティに寄与する一つの要因にはなりうるであろう(佐々木・尾崎,2007)ことは念頭においておく必要がある。

第二節 性別違和感

(1)性別違和感の定義

2015年、本邦において「性の多様性」をめぐる様々な社会的潮流が起きた。4月に東京都渋谷区で「渋谷区男女平等および多様性を尊重する社会を推進する条例」が施行され、同性カップルを「家族に相当する関係である」として、不動産賃貸借の契約時や病院での面会時などにも利用できる証明書が発行できるようになった。渋谷区に続いて現在都内では世田谷区や中野区でも同性間のパートナーシップを認める条例が施行されている。7月にも沖縄県那覇市が「性の多様性を尊重する都市・なは宣言(レインボーなは宣言)」を、大阪府淀川区の「LGBT支援宣言」(2013)に次いで行った。「性の多様性」に関する関心は国内でも高まりつつある一方、それを認め合える社会を築き、心理的にも社会的にも行きやすい環境にしていくためには、まだ多くのハードルがあることもまた事実である。

一般的な性のあり方とは、身体的性とジェンダーアイデンティティが一致しており(シスジェンダー)、恋愛や性愛の対象が異性に向いている状態(ヘテロセクシュアル)を指す。性のあり方がこの組み合わせとは異なる人を指して、セクシュアル・マイノリティという。セクシュアル・マイノリティとは性的少数者と訳される。セクシュアル・マイノリティのカテゴリーとして近年「LGBT」という概念が浸透しつつある。LGBTとは、Lesbian(女性同性愛者)、Gay(男性同性愛者)、Bisexual(両性愛者)、Transgender(出生時に指定された性別とは別の性への移行を望む者)の文字を取った言葉である。このうち、トランスジェンダーがいわゆる「性同一性障害」あるいは「性別違和感」の概念の一部分に当たる。米国精神医学会(2013)が発行した Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders-5(精神障

害の診断・統計マニュアル：DSM-5)にて、従来の”Gender Identity Disorder”から”Gender Dysphoria”に疾患名を変更した。その翌年の 2014 年、日本語訳の検討にあたり、日本精神神経学会が「性同一性障害」から「性別違和感」に疾患名を変更した。「性同一性障害」は、反対の性に対する強く持続的な同一感と自分の性に対する持続的な不快感、またはその性の役割についての不適切感に特徴付けられるが、この診断基準も変更された。性別への身体的な違和感がなくても、期待される性役割に対する違和感が強ければ、診断基準を満たすと変更された(針間,2015)。また、2018 年 6 月の WHO の発表で、約 30 年ぶりに International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems (国際疫病分類：ICD)を改訂し、現行の ICD-10 では「精神・行動・神経発達障害」に分類されている「性同一性障害」を、「性の健康に関連する状態」に分類し「性別不合(厚生労働省のつけた仮訳):Gender Incongruence」という項目になった。

では、「性別違和感」とはなにか。中塚(2017)は生物学的性とジェンダーアイデンティティ(性自認)とが一致しないため、「自分の身体が自分のものではないような感覚」と定義し、生物学的性に対する「嫌悪感」について強調した。康(2017)は、「戸籍上の性と性自認が一致せず、戸籍上の性に当てはめられることにストレスや違和感を抱くこと」と定義した。佐々木(2017)は「出生時に割り当てられた性別に対して一貫して同一感を持たない状態」と定義し、それは置かれた環境で強まったり弱まったりすると示唆した。本研究では、吉川(2018)の定義に倣い、「出生時に指定された戸籍上の性に対して、一貫した同一感を持たない状態」を「性別違和感」と定義することとする。

(2)性別違和感を抱く当事者の定義

「性別違和感を持つ人」には、トランスジェンダーや X ジェンダーなどの概念がある。トランスジェンダー(Transgender)は出生時に指定された戸籍上の性別とは反対の性別への移行を望む者として定義される。この中で、戸籍上男性としてみなされているが女性への移行を望む者を Male to Female(MtF)あるいは Transwoman と表し、戸籍上女性とみなされているが男性への移行を望む者を Female to Male(FtM)あるいは Transman と表す。X ジェンダーとは、出生時に指定された戸籍上の性別のいずれかに二分された性別の自覚(性自認)を持たず、男女どちらでもある、あるいはどちらでもない、男女の中間に位置する、さらにはそのどれでもない、などといった自己の性の認識を持っている者を指す。

「X ジェンダー」という言葉は日本独自の呼称であり、諸外国では queer や Third gender

等の方が通じることもあるが、日本では「X ジェンダー」の方が浸透しつつある。X ジェンダーは、「男女どちらか片方のみに属した性自認を持たない人(label X,2016)」という点において、トランスジェンダーとは異なる定義である。X ジェンダーには、大まかに分けて「中性」「両性」「無性」「不定性」「その他」の5つのカテゴリーがある。以下、簡単に内容を説明する。「中性」はある性とある性の中間に位置する性自認、「両性」はある性とある性を同時に併せ持つ性自認、「無性」は特定の性自認を持っていない性自認、「不定性」は時間単位、日にち単位などで自身の性自認が不定期に変化する性自認、「その他」はこのいずれにもあてはまらない、例えば「3 つ以上の性自認」や「性自認自体が存在しない」などを指す。

DSM-5 では、性別違和(Gender Dysphoria)の有病率について、出生時が男性の成人では 0.005~0.014%、出生時が女性の成人では 0.002~0.003%であるとしているが、ホルモン治療や性別適合手術を求める成人全てが専門的な医療機関を受診するわけではないので、これらの有病率は過小評価されていると補足している。日本においては、出生時が女性の割合が、出生時が男性の割合より 2.2 倍高いとされている。

(3)性別違和感を抱く人の危機

トランス女性の 33.6%、トランス男性の 70.0%が小学校入学以前から性別違和感を感じており、全体でも約 9 割が中学生までに自覚していたことが示唆されている(中塚,2015)。思春期・青年期における性別違和感が危機となる背景には、それが死を導く危険性が高いということがある。ジェンダークリニックの受診者の中で自殺念慮経験者が 58.6%(トランス女性 63.2%、トランス男性 55.9%)、自傷・自殺未遂経験者が 28.4%(トランス女性 31.4%、トランス男性 26.6%)と示唆されている。自殺念慮の発生時期のピークは一次に二次性徴による身体の変化や恋愛の問題、学校という環境の問題などが重なる思春期の頃、二次に就業や結婚などに纏わる困難が生じやすい社会に出る前後の青年期から成人期初期であることが多いとした上で、学校および就労の場における「性同一性障害(性別違和感)」への理解と対応の重要性について言及している(中塚,2013)。

この思春期・青年期は Erikson(1959)の心理社会的発達理論における「自我同一性(アイデンティティ)対拡散」の時期にあたる。個人の行動や考え方の基盤となるアイデンティティは、試行錯誤を繰り返しながら生涯を通して確立されていくものではあるが、心理社会的な影響を受けながら、自己の内面で起こる葛藤との折衝を重ね、個々の歩幅で確立の道

を歩みだそうとする青年にとって、特に重要な発達課題とされる(吉川,2018)。「自分は何者であるか」という自己の存在についての命題と向き合い、模索することが求められるこの時期に、性別違和感を抱える青年は自らのジェンダーアイデンティティまでもが危機に晒され、その揺らぎを学校や家庭などの生活場面で絶えず刺激される状況におかれる。以上からも性別違和感を抱える青年・成人は心理的危機状態に陥りやすいことが示唆される。

また、自身の性別違和感を受容し、望むような性のあり方になろうという人生の選択をしたとしても、現在の社会制度上、容易にそれができる環境はない。「性同一性障害特例法」において、戸籍上の性別を変更することが認められてはいるが、そのために必要な条件として、専門知識を有した2名以上の医師により「性同一性障害」の診断を受けていること、20歳以上であること、現に婚姻をしていないこと、現に未成年の子がいないこと、生殖腺の切除または生殖腺の機能を永続的に欠く状態にあること、性器の外観を望む性別に近いものに変える手術を受けなければならないことが示されている。2018年4月には、この性別適合手術(Sex Reassignment Surgery: SRS)はGID学会の認めた一部の病院において公的医療保険の対象となることが決まったが、多くの性別違和感を抱える人々がまず手始めに行う治療であるホルモン療法については未だに保険の適用外である。男女二分論が前提とされ、法的にも社会的にも受け入れられがたい性別違和感を抱える人々にとって、幾度となくさしあたる危機的状況から脱するためには、様々な障壁を乗り越えなければならないのである。

(4)性別違和感と自閉症スペクトラム障害(Autism Spectrum Disorder: ASD)

ところで、DSM-5に「一般集団と比べて性別違和感をもつ子どもおよび青年において、自閉症スペクトラム障害の有病率がより高い」との記述があるように、近年欧米圏で自閉症スペクトラム障害(以下、ASDと表記する)と性別違和感の関連が注目されてきている。ASDの症候は、社会的相互作用及びコミュニケーションの障害と、限定的・反復的行動の二つ(川崎・荻布,2018)であり、Wing(1996)はASDの心理的機能について「社会的交互作用(social interaction)」、「コミュニケーション(communication)」、「想像力(imagination)」の障害(障害の三つ組 triad of impairment)に基づいて成り立っていると述べた。

オランダの de Vries ら(2010)は、児童思春期科の性同一性外来を受診した症例において、204名中16名(7.8%)で自閉性障害またはアスペルガー障害の診断が可能と報告し、これは一般集団におけるASDの罹患率である0.6~1%よりも10倍程度高い(Baird *et al.*,

2006; Fombonne, 2005)と述べた。これについて de Vries らは, ASD 特有の剛性が原因で, 幼少期に柔軟に対処すべき性的に異なる感情を扱いにくいために, ジェンダーの発達がなされないのではないかと考察した。アメリカの Shumer ら(2016)は, ジェンダークリニックを受診した 8~20 歳までの患者 39 名に ASDS(アスペルガー症候群診断尺度)を実施し, うち 9 名(23.1%, うち 4 名は正式に診断を受けている)がアスペルガー障害の可能性があると報告し, 性別不快感(性欲不振)と ASD の発症に出生前アンドロゲン曝露が関与していると示唆した。アメリカの神経心理学者 Strang ら(2014)の研究では, ASD 児 147 名, ADHD(Attention-deficit hyperactivity disorder: 注意欠如・多動性障害)児 126 名の親へのインタビューによって, ASD 児では 5.4%, ADHD 児では 4.8%が性別違和の疑いがあると報告した。

日本では館農ら(2011)が, 臨床現場での症例 4 つを挙げ, それぞれにおいて治療の内容や経過, 評価の注意点などについて検討し, 社会性の障害に起因する対人関係の問題の置き換えとして性別違和感が起こる可能性を示唆した。木部(2009)は精神分析の見解から, 自閉症のこころの病的発達について, 乳幼児期の母子の情緒的相互関係の享受のできなさからくる自我同一性の混乱と, 幼児性欲(多型倒錯的傾向)の残存からくる性的倒錯から, 性同一性障害に至る可能性を示した。杉山(2005)は自身の臨床経験を基に, 性同一性障害は広汎性発達障害患者の自己イメージを結ぶ能力の拙さから, 自己の性的イメージの混乱が生じる, あるいは, 社会性・共感性の障害からくる不適応の原因を自己の性的属性に求めて, 反対の性に同一化することで不適応を解決しようとする独特のファンタジーであると論じた。元来, ASD は自分という自我同一性の問題がある上に, 青年期には性同一性障害, 性的倒錯などの性の問題へと展開することがある。これは取り扱いが難しく治療が困難であるため, 彼・彼女らは社会適応にも困難をきたす(木部, 2016)ことがある。ASD において性に関する問題が取り上げられることは少ないように思えるが, 見過ごすことはできない重要な要素, あるいは特性の一つなのではないだろうか。

前述したように, 自閉症 ASD の患者は自己というものの感覚が混乱しているか, あるいはその発達を困難としていることが示唆されている。Barrows(2008)は, 自身が臨床現場で出会った患者の症例報告を元に自閉症患者の自己感のなさについて, 乳児期において自己を認識できないか, あるいはおそらく十分に抱えられコンテインされたと感じる接触到耐えられないために, 母親や養育者との基底的原初的コミュニケーションに失敗し, 無感覚で空虚的な自己感になる(自我機能が発達しない)と述べた。Meltzer ら(1975)は, 外的

対象との明瞭な体験を感じ取ることが困難であるために外的対象のコンテイン機能の形成不全がまず起こり、コンテイナーとしての自己の概念を形成することにも失敗する。この結果、外的対象の心の機能そのものに大きく依存する必要性が生まれ、自我機能の遂行のために母親対象(もしくは母親転移の対象)を自己の延長として用いることに関わってくる」と述べた。Grotstein(1989)は自閉症者の自己感について、「存在している感覚が完全に失われ、同一性の母体が消失し、逃れようもなく無と無意味の状態に落ちて」いる状態であるとし、『存在できない』という根本的な体験は、ブラックホール、底なし地獄、空虚」と述べた。

このように、自我機能そのものが発達しにくい ASD の患者は、青年期になり自我同一性(アイデンティティ)の形成が課題とされる時期に差し掛かると、基盤となる自我のなさが露呈し、大きな混乱に巻き込まれるのではないだろうか。ASD の特性がアイデンティティ形成に困難をきたすのであれば、ジェンダーアイデンティティの形成にもその影響があると言えないだろうか。

第三節 問題と目的

日本でも臨床症例報告としての ASD と性別違和感の関連について検討した研究は散見されるが、実際にエビデンスとしてその詳細な関連について調査した研究は見つからない。そこで本研究ではまず研究Ⅰとして、性別違和感を抱える当事者に Web アンケートを実施し、性別違和感と ASD との関連度について調査を行う。また伊藤(2001)は女子において、女性に圧倒的に多い摂食障害という問題に関する文脈の中で、性の非受容や性成熟の戸惑いが自尊心と関連があると示唆している。また男性においては松木(1997)が摂食障害をもつ男性におけるジェンダーアイデンティティについて論じている。したがってジェンダーアイデンティティの揺らぎと、自尊感情の低下に基づく不適応が予想される人々とは関連があることが推察される。また、佐々木・尾崎(2007)の作成したジェンダーアイデンティティ尺度とも有意な相関が見られているため、自尊感情との関連も併せて調査を実施することとする。研究Ⅱでは、当事者のジェンダーアイデンティティの形成過程を半構造化面接によるインタビュー調査で聞き取り、ASD 群と非 ASD 群で比較する。ASD 群と非 ASD 群では、自我同一性の感覚の違いから、一口に性別違和感と言ってもその感じ方(身体的感覚・社会的感覚・自認の有り様など)や受容の仕方、違和感を感じたきっかけやプロセスが

異なることが予想される。性別違和感を抱える当事者のジェンダーアイデンティティ形成のプロセスについて、進学やキャリア選択、就職、結婚などの人生において必須の出来事に伴って経験される行為や心情に着目し、重要な分岐点や他者との出会い・関わりは何かを質的に検討することを目的とする。但し、過去の捉え方は現在の状態の影響を受ける(吉川,2018)ため、語り手には可能な限り、出来事に伴う心情を引き出してもらい、研究協力者たちの心理的様相を鮮明に描くことを目標とする。

第二章 研究 I

第一節 方法

(1)調査対象

ある当事者コミュニティ(約 100 名在籍),また当事者間の交流が可能な SNS にて Web アンケートを公開,任意で研究協力者を募った。アンケートの回答数は 104 名,うち性自認が男性と回答した人は 27.9%(29 人),女性と回答した人は 9.6%(10 人),両性またはどちらでもないと回答した人は 62.5%(65 人)であった。身体的性別(生まれた時に割り当てられた性別)は男性が 20.2%(21 人),女性が 78.1%(82 人),間性(インターセックス)が 0.01%(1 人)であった。また,うち 22.1%が 10 代,42.3%が 20 代,18.3%が 30 代,11.5%が 40 代,3.8%が 50 代,1.9%が 60 代であった。

(2)調査手続き

調査期間:2018 年 11 月 3 日~2018 年 12 月 3 日

アンケート公開の前に,2つのコミュニティの責任者(全4名)にアンケートの内容を閲覧してもらい,内容の確認と修正すべき点などの指摘を頂けるよう依頼した。アンケート公開の許可と承諾を得てから,コミュニティ会員専用のメーリングリストおよび SNS にてアンケートの URL を添付した内容のメッセージを配布した。メッセージには本研究における性別違和感の定義と,どのような質問があるかなどの簡単な内容,インタビュー調査の協力者も併せて募集している旨,アンケート調査にかかる所要時間などを記載した。また,Web アンケートのフェイスシートにも同様の内容を記載した。フェイスシートでは,所属(職業,学生など)と年齢,自由記述による性別を問う項目を設けた。アンケートの作成には Google フォームを使用した。テーマ色には男女のイメージを強く連想させるもの(赤や青など)にならないよう,紫色を使用した。

(3)調査内容

①AQJ(日本語版自閉症スペクトラム指数)...若林・東條ら(2004)が邦訳した尺度で,元は Cohen ら(2001)が作成した AQ(Autism-Spectrum Quotient)。50 項目 4 件法からなる。高い信頼性と妥当性が確認された自己回答式の尺度であり,健常範囲の知能を持つ成人の自

閉症傾向を簡便に測定できる。若林・東條らの研究では,AQJにおいて 50 点中 33 点(カットオフ値)以上の場合は臨床的な障害となりうる水準の自閉症傾向を持っていると示唆されている。また AQ において成人の高機能自閉症あるいはアスペルガー症候群(以下 AS/HFA 群)が健常群と比べて得点が顕著に高い(AS/HFA 群平均:37.9 点,統制群:18.5 点)ことから AQ が一定の診断的妥当性を持つことが示され, AS/HFA 群にて本人による回答と親による評定結果に高い相関が認められている($r=0.71, df=30, p<.01$)ことから AS/HFA 群による自己回答の場合でも一定の信頼性が認められる。

②ジェンダーアイデンティティ尺度(Gender Identity Scale: GIS)...佐々木・尾崎(2007)が作成。15 項目 7 件法からなる。Erikson(1959)のアイデンティティ感覚の概念を取り入れ, 谷(2001)の多次元自我同一性尺度(MEIS)を元に作成された。社会的性役割を測定する項目が多かったそれまでのジェンダーアイデンティティ尺度とは異なり, 自己の性別の有り様を抽象的に問うことによって, 身体的性別と性自認が同じでなくとも, 同性愛指向をもっている, 文化社会における性役割の具体的な内容が変容したとしても使用できる尺度になっている。性自認によって回答する質問の一人称としての性別が異なるような工夫がされている。尺度項目が記載されている質問ページの前頁で性自認を女性・男性・両性またはどちらでもないのいずれかから選択し, 選択した自認によって A・B・C のページにそれぞれ切り替わるようにアンケートページを作成した。15 項目の質問の最後に身体的性別(生まれたときに割り当てられた性別)を女性・男性・間性(インターセックス)から選択する項目を設けた。

③ローゼンバーク自尊感情尺度日本語版...山本・松井・山成(1982)が邦訳したものを採用。Rosenberg(1965)が作成。原文では 10 項目 5 件法であるが, 中立的選択肢(「どちらともいえない」)を設けると質問の意味が理解できなかつたり, 明確にどちらの極とも取れないと思った場合に中央の選択肢を選ぶ可能性が高まると考えられる。ここでは個人の微妙な感情の違いを明確に数値で表現することを重視したため, 松並・西尾(2018)を参考に 4 件法で回答を得た。Rosenberg 自尊感情尺度は様々な研究者が日本語版を作成しているが, 並川(2018)が日本における Rosenberg 自尊感情尺度を使用した研究を調査した結果, 61 件中 44 件(72.1%)でこの山本ら(1982)訳のものが使われているため, 本研究でもこちらの尺度を採用した。ただし, 「少なくとも人並みには, 価値のある人間である」という項目のみ, 質問紙配布前のコミュニティ責任者による確認において, その表現の過激性から削除して欲しいとの依頼があったため, 倫理的配慮により削除した。そのため本研究では 9

項目 4 件法で尺度作成をした。

④記述式質問項目...4 尺度による質問項目の回答終了後、記述式の質問を 7 つ設けた。こちらへの回答は任意のため回答してもしなくてもよい旨をフェイスシートおよび選択式質問の最終ページ下部に示した。

⑤面接調査のお願い...より詳細な性別の違和感の内容、また違和感に基づく困難さ、現在の性自認が確立するまでのプロセスを明らかにするため、面接調査の協力をお願いしたい旨を末尾に記載した。インタビューの際に呼ばれたい名前(本名でなくても可、フルネームでなくても可とした)と、筆者からのメールが受信可能な連絡先、可能な範囲での居住地を問う質問項目を設けた。

(4)分析方法

若林・東條ら(2004)のカットオフ値を基準として ASD 群、非 ASD 群の 2 群に分け、日本語版自閉症スペクトラム指数(以下 AQJ)、ジェンダーアイデンティティ尺度(以下 GIS)とローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版(以下自尊感情尺度)の得点の平均の差を検定するために対応のない t 検定を行った。また、尺度間の相関を求めて個人のプロフィールの傾向を明らかにするため、AQJ-GIS 間、AQJ-自尊感情尺度間、GIS-自尊感情尺度間で Pearson の積率相関係数を算出した。

第二節 結果

(1)使用するデータの処理

本研究では性別違和感を抱える当事者を対象として調査を行った。そのため身体的性別と性自認が一致している(同性である)データに関しては、研究の趣旨と適さないため分析するデータから削除した。結果、有効となったデータ数は 101 件であった。

(2)内的整合性の検討

AQ において尺度全体の内的整合性を確認したところ十分な信頼性が認められた($\alpha=.86$)。同じく GIS において尺度全体の内的整合性を確認したところ十分な信頼性が認められた($\alpha=.86$)。自尊感情尺度は先行研究と同様に単一単因子構造であるとみなし、内的整合性を

確認したところ、十分な信頼性が認められた($\alpha=.88$)。そのため本研究でも自尊感情を単一因子として扱うことにした。

(3) ASD 群・カットオフ値の設定

若林・東條ら(2004)の研究では、AQ の得点が 33 点以上であれば ASD において障害レベルとして診断する場合の手がかりの一つになっているとしている。これは、33 点以上には AS/HFA 群の 87.8%が含まれるのに対し、健常群ではわずかに 3%弱(大学生 2.8%,社会人 2.6%)しか含まれないからである。33 点というカットオフ値は前述のように障害レベルで鑑別がある程度可能とされている数値である。本研究では、AQJ の得点がカットオフ値である 33 点以上の場合を「ASD 傾向群」と称し 33 点未満の「非 ASD 群」と比較した。また、栗田ら(2004)によると 30 点以上の場合は 50%の確立で ASD 傾向が陽性であり、30 点未満の場合は 96%の確立で ASD 陰性であるとしてカットオフ値を 30 点としている。若林・東條ら(2004)の研究では、29 点以上に AS/HFA 群の 93.0%が含まれる。一方、29 点台において健常群では大学生で 12.5%，社会人で 5.6%含まれるのに対し、30 点台においては健常群では大学生で 9.3%，社会人で 4%が含まれる。したがって、30 点台においては AS/HFA 群の割合が健常群の大学生・社会人の割合より 10 倍以上になるため、本研究では 30 点を便宜的なカットオフ値と設定し「ASD 傾向群」と「非 ASD 傾向群」に分け、ASD 傾向群を「障害レベルには満たないがある程度 ASD の特性を持っている可能性がある群」として比較する。

(4) ASD 群と非 ASD 群との比較

有効な回答数 101 件中、AQJ の得点が 33 点以上だった者は 18 名、割合にして全体の 17.8%であった。AQJ の得点が 30 点以上だった者は 34 名、割合にして全体の 33.7%であった。したがって 33 点以上の 18 名を ASD 群、33 点未満の 83 名を非 ASD 群とした。また 30 点以上の 34 名を ASD 傾向群、30 点未満の 67 名を非 ASD 傾向群とした。ASD 群と非 ASD 群および ASD 傾向群と非 ASD 傾向群の間で AQJ の得点の平均値の差の比較をするため、対応のない t 検定を行ったところ、table 1 のような結果となった。いずれも 2 群間の平均値の差は 1%水準で有意差があると認められた(ASD 群-非 ASD 群: $t=13.24$, $p<.01$, ASD 傾向群-非 ASD 傾向群: $t=12.99$, $p<.01$)。

table 1 ASD群と非ASD群, ASD傾向群と非ASD傾向群間でのAQJ得点の t 検定

群	平均値	標準偏差	t 値
ASD群($N=18$)	37.28	3.77	13.24**
非ASD群($N=83$)	21.94	6.77	
ASD傾向群($N=34$)	34.26	4.25	12.99**
非ASD傾向群($N=67$)	19.81	5.73	

** $p<.01$

(5)各尺度における2群間の比較

次に, ASD 群と非 ASD 群および ASD 傾向群と非 ASD 傾向群との間で, GIS および自尊感情尺度の得点の平均値の差を比較するため, 対応のない t 検定を行ったところ, table 2 のような結果となった。いずれの群分けの場合でも GIS では 2 群間に差は見られなかった(ASD-非 ASD: $t=1.02$, ASD 傾向-非 ASD 傾向: $t=1.26$)が, 自尊感情では 1%水準で有意差が見られた(ASD-非 ASD: $t=2.87$, $p<.01$, ASD 傾向-非 ASD 傾向: $t=4.22$, $p<.01$)。

table 2 ASD群と非ASD群, ASD傾向群と非ASD傾向群間の各尺度における t 検定

尺度	群	平均値	標準偏差	t 値
GIS	ASD群($N=18$)	54.44	14.15	1.02
	非ASD群($N=83$)	58.65	16.38	
	ASD傾向群($N=34$)	55.15	15.03	1.26
	非ASD傾向群($N=67$)	59.3	16.81	
自尊感情	ASD群($N=18$)	16.39	5.79	2.87**
	非ASD群($N=83$)	20.86	6.78	
	ASD傾向群($N=34$)	16.47	5.84	4.22**
	非ASD傾向群($N=67$)	21.88	6.57	

** $p<.01$

(6)各尺度間の相関

AQJ の得点と GIS および自尊感情尺度の得点の間で Pearson の積率相関係数を算出したところ, table 3 のような数値が得られた。AQJ と GIS との間に負の相関がみられた($r=-.29, p<.01$)。AQJ と自尊感情尺度との間に中程度の負の相関がみられた($r=-.55, p<.01$)。AQJ と GIS・自尊感情尺度の得点の間でいずれも負の相関を示したため, GIS と自尊感情尺度間でも Pearson の積率相関係数を算出したところ, table 3 のような数値が得られた。GIS と自尊感情尺度との間には中程度の正の相関が見られた($r =.49, p<.01$)。

table 3 各尺度間における Pearson の積率相関係数(r)の算出結果

	AQJ	GIS	自尊感情
AQJ	—	-.29**	-.55**
GIS		—	.49**
自尊感情			—

** $p<.01$

第三節 考察

(1)性別違和感と ASD 傾向

本研究では当事者を対象として回答を得られた 101 名のうち 18 名(17.8%)が AQJ において若林・東條ら(2004)のカットオフ値 33 点よりも高い得点を示し、「ASD 群」とした。また栗田(2004)のカットオフ値 30 点に従うと、34(33.7%)名が「ASD 傾向群」に当てはまった。結果より、ASD 群は非 ASD 群よりも、ASD 傾向群は非 ASD 傾向群よりも AQJ において有意に得点が高いことが示された。先行研究ではオランダの児童思春期科の性同一性外来を受診した 204 名において、7.8%が自閉性障害またはアスペルガー障害の診断が可能と報告しており(de Vries *et al.*,2010), またアメリカではジェンダークリニックを受診した 8~20 歳までの患者 39 名のうち 23.1%がアスペルガー症候群の可能性があると報告している(Shumer *et al.*,2016)。これらの先行研究では AQ を使用していないので本研究との単純な比較をすることはできない。また先行研究ではいずれも児童~青年期・成人期初期の患者を対象としており、本研究では 10 代~60 代まで幅広い年代から回答を得ているため、その点においても一概に比較することはできないだろう。ただし、オランダやアメリカでの研究報告と比較しても、本邦における性別違和感を抱える当事者のうち ASD 傾向のある者の割合に、大きく違いはないのではないと思われる。

すなわち、文化や社会的環境が ASD と性別の違和感の間に影響を及ぼしている可能性が低いということが推察できるだろう。

次に、性別違和感のない者のうちの ASD 傾向のある者の割合との比較について考察する。日本において、AQ(50 項目)を用いて無作為抽出された集団の中の ASD 傾向のある者の割合を調査した先行研究がいくつか存在する。北添ら(2009)が大学生を対象にした調査では 4.0%、高橋ら(2012)が同じく大学生を対象にした調査では 4.2%であった。以上はいずれもカットオフ値を若林・東條ら(2004)の 33 点として設定している。大学生、大学院生を対象とした栗田ら(2003)の調査では 4.5%で、こちらは元の AQ に基づいてカットオフ値を 32 点としている。また伊勢ら(2015)の大学生を対象とした研究では、栗田(2004)を参考にカットオフ値を 30 点と設定し、30 点以上の人を高 AQ 群とした。その結果 78 名中 15 名が高 AQ 群とされ、割合としては 20.5%であった。本研究ではカットオフ値を 33 点とした場合の ASD 群の割合が 17.8%、30 点とした場合には 33.7%と示されており、いずれの場合においても無作為抽出された集団の中の ASD 群の割合よりも、性別違和感のある当事者の中の ASD 群の割合の方が大きく上回ることが明らかになった。したがって、ASD

者の中には性別違和感を抱える者が比較的多く含まれるという可能性が示唆された。

(2) ASD 傾向とジェンダーアイデンティティ

ASD 群と非 ASD 群との間で GIS 得点の平均値に差はみられなかったが、AQJ 得点と GIS 得点の間には有意な負の相関が見られ、ASD の特性が強くなるほどジェンダーアイデンティティが不確実になる可能性が示唆された。これは ASD の特性としての自我同一性(アイデンティティ)の不安定さが影響していると考えられる。Spensley(1995)は、「子どもは外界を探求して発見した対象に触れたり、口に入れたり等で体験を区画し、整理するという作業を通じて主体的な『自分 me』を獲得するが、自閉症の乳児は未知の、予測できないものを徹底的に排除する。そのように対象に強迫的にかかわることによって『自分でない not me』世界から確実に孤立する。そうしてそれ以上『自分でない not me』世界と意味ある接触をすることを阻むように自己の世界に耽り、永遠に続く自己充足と自己完結の循環が生まれる」とした。すなわち、自分一人の世界に固執するが故に、永遠に自己完結、自己愛の世界に留まってしまう。自己愛の世界に留まりすぎると、やがてそれは誇大的な自己愛に変容していく恐れがある。永遠の自己完結の世界に留まっている ASD 者は青年期において非 ASD 者と同じく自己愛が高まり、もともと誇大的であった自己像が更に大きく発展する。にも関わらず、その特性による社会性やコミュニケーションの障害から、恋人や友人・仲間などの重要な他者との適切で親密な関係を築くことができず、「注目・賞賛欲求」は十分に満たされず、自己愛は青年期に適切に処理されないために、自我同一性の形成に困難をきたすと考えられる。

自我同一性が形成されないと、それは性同一性の問題へと発展し得る。青年期はそうではなくとも恋愛や友人関係、更には第二性徴に伴う身体的変容も含めて、自己の性やジェンダーについて向き合うことが必要とされる時期である。ASD 者は自己感のなさで自我同一性の形成の困難さ故に「自分は何者なのか」という問いに加えて「自分は女性なのか？男性なのか？あるいは女性でも男性でもないのではないか？」という問いの中に巻き込まれていくと考えられる。あるいは、館農ら(2011)や杉山(2005)の指摘にもあるように、特性としての社会性やコミュニケーションの問題から、同性の友人達との関係が上手くいかず、その不適応の理由を自己の性的属性に求め、「自分は女性/男性ではないからだ」として、反対の性に同一化するということからくる性別違和感である可能性も示唆される。前者のように自我同一性そのものが不明瞭であったり混乱していたりする場合には、明確なジェ

ンダーアイデンティティはない、あるいは両性を持ち合わせる性自認となるのではないかと予想される。後者のように自身の特性に基づく不適応を反対の性に同一化することで理由づけしている場合は、その性自認はトランスジェンダーの様相を呈してくるのではないかと予想される。ASD 傾向群 34 名において、性自認を女性とした人は 3 名(8.8%)、男性とした人は 14 名(41.2%)、両性またはどちらでもないとした人は 17 名(50%)であった。前述の仮説に基づくと、ASD 群において男女いずれかの性自認を持つ人と、両性またはどちらでもない性自認をもつ人とでは恐らくジェンダーアイデンティティの感覚も自我同一性の感覚も異なるであろうと考えられる。また ASD 群におけるジェンダーアイデンティティと非 ASD 群におけるジェンダーアイデンティティでも自我同一性の感覚も含めて異なるであろうと考えられる。

(3)ASD 傾向と自尊感情

ASD 群は非 ASD 群よりも自尊感情尺度得点の平均値において有意に低く、また AQJ 得点と自尊感情尺度得点の間には有意な負の相関が見られ、ASD の特性が強くなるほど自尊感情が低くなる可能性が示唆された。これまで、ASD の特性と自尊感情との関連について研究したものがいくつか存在している。一門・住尾・安部(2008)は 13～29 歳の LD(学習障害)・HFA(高機能自閉症)・AS(アスペルガー障害)・ADHD の診断を受けた 30 名(軽度発達障害群)と、障害のない 30 名(対象群)を対象に自尊感情を測定した結果、軽度発達障害群の方が対象群よりも自尊感情が低いことが明らかになった。八木(2016)は、男子大学生(392 名)の大学生活への適応について、対人関係の困り感および自尊感情の関連について研究した。自閉症スペクトラム障害的困り感尺度大学生版(AS 困り感尺度:山本・高橋,2009)と日本語版自尊感情尺度(山本・松井・山成,1982)を用いて調査したところ、AS 困り感尺度の因子全てと自尊感情が負の相関を示した。すなわち ASD 的な特性による困難さは自尊感情を低下させることが示唆された。小島(2018)は 18～29 歳の ASD 診断を受けている 27 名(ASD 群)と、診断のない大学生 60 名(対照群)を対象に調査した。その結果、ASD 群と対照群との間で自尊感情に差はなかった。ただし、ASD 群において、学生の方が社会人より自尊感情が低いことが明らかにされた。

このように、研究によって障害のない者と ASD の特性を持つ者との間で自尊感情に差があるかないかは異なっている。しかし、本研究における ASD 群のように、高い ASD 傾向と性別違和感の両方を持ち合わせていると、自尊感情の低下にもより大きく関係してく

るものではないかと考えられる。内田・福本(2015)は自尊感情を対人関係スキルと関連する「適応感」の概念の中に含めたが、ASD 傾向が高く性別違和感を抱えている者は、ASD の特性によって対人コミュニケーションが困難なことからくる適応感のなさ、自分の身体的性への適応感のなさの両面から不適応感・困難さを抱えることになる。ダブルマイノリティであることからくる孤独感や不適応感、および自我同一性・ジェンダーアイデンティティの両側面における自身への了解不能な感覚は、Rosenberg(1965)の定義した、自分は「これでよい(good enough)」と感じる自尊感情の側面の獲得を妨げるであろうことが予測できる。

(4)ジェンダーアイデンティティと自尊感情

GIS 得点と自尊感情尺度得点の間に有意な正の相関が見られ、ジェンダーアイデンティティが強固になるほど自尊感情が高くなる可能性が示唆された。ジェンダーアイデンティティと自尊感情との関連について研究したものをいくつか例に挙げて考察する。吉村(2017)は、本研究で使用したのと同じ GIS(佐々木・尾崎,2007)と、自尊感情尺度(山本・松井・山成,1982)を使用した。その結果、大学生においてジェンダーアイデンティティ高群の方が中群・低群よりも自尊感情が高いことが示唆された。佐々木・尾崎(2007)は性同一性障害でない男性以外(性同一性障害の当事者および、性同一性障害でない女性)においてジェンダーアイデンティティと自尊感情に正の相関が見られ、他者や社会にどう見られるか、どう受け入れられるかのみが自尊感情に影響するのではないかと考察している。長谷川・松崎(2013)は、性別の3要素(①身体の性別:生物学的性別・セックス, ②社会的な性別, ③心の性別)が一致していない群をトランスジェンダーと定義して、自己肯定意識との関連を調査した。その結果、性別の3要素が一致していないことが必ずしも自己肯定意識の低さに結びつかないとした上で、性別の3要素の一致性よりも現在の心の性別の一貫性が、自己肯定意識の高さに関係するとした。過去においてトランスジェンダーは自身の性別について苦しみ、不安定さを持っていたが、現在の自分の性別について一貫した強い感覚を持っており、将来においても自身の性別について安定した感覚を持っていることが、高い自己肯定意識につながっていると考察している。大山(1995)は、大学生を対象に調査を行い、男子では例えば「行動力がある」「積極的」というように自己のパーソナリティを男らしいと認知しているほど最も自己を肯定的に評価し、女子では自己の身体を女らしい、とりわけ身体がほっそりとして色が白いと認知しているほど、最も自己を肯定的に評価す

ることを明らかにした。

ジェンダーアイデンティティの確立に伴って自尊感情が高まるということは、Rosenberg(1965)の定義を基にすると、「自分の性別はこれでよい」という感覚が強くなるということであろう。性別違和感を抱える当事者の中には、「自分の性別はこれでよい」と感じている者も言えば「自分の性別に迷いがある」者もいるであろう。シスジェンダーの者であっても確固たるジェンダーアイデンティティを自認しているとは限らない。社会や文化、家庭内での役割等によって変容することもあるだろう。しかし、たとえXジェンダーの無性、すなわち「自分には性別がない」というジェンダーアイデンティティを持つ者であったとしても、「自分の性別はこれ(無性)でよい」と思っていれば自尊感情は高まるのである。自分の身体やパーソナリティを自認する性別に近付けたいあまりに、理想化された性別の特性を追い求めれば追い求めるほど、自己への自信を失い、否定的な自己像を抱くことになってしまう(大山,1995)と示唆されているように、「とてもよい(very good)」(Rosenberg,1965)、すなわち(身体も心も)完全な性別を手に入れることに固執せず、「これでよい(good enough)」という性別に落ち着くことができれば、自尊感情を保つことができると考えられる。しかしそれは反面、身体的な違和感や社会的な違和感などが強ければ強いほど、ジェンダーアイデンティティは安定せず、自尊感情が低下するということに他ならない。自尊心が低いほど自殺念慮が高い(稲垣ら,2012)とされているが、中塚(2013)はジェンダークリニック受診者のうち自殺念慮経験者が 58.6%(トランス女性=63.2%, トランス男性=55.9%),自傷・自殺未遂経験者が 28.4%(トランス女性=31.4%, トランス男性=26.6%)と示唆している。また自殺念慮の発生時期は一次に二次性徴による身体の変化や恋愛の問題、学校という環境の問題などが重なる思春期の頃、二次に就業や結婚などに纏わる困難が生じやすい社会に出る前後の青年期から成人期初期にピークを迎えるとしている。これらの時期は身体の問題、あるいは社会・環境における障壁(例：就活で性自認に基づくスーツを着ることができない等)などでジェンダーアイデンティティも不安定になりやすい。したがって自尊感情も低下し、自殺念慮が高まる可能性が示唆される。すなわち、ジェンダーアイデンティティの不安定さと共に自尊感情が低下し、遂には自殺を考えるまでに精神的に衰弱してしまう危険性があると言えるだろう。

自己の性自認に基づいたジェンダーアイデンティティを保つためには、社会や環境の整備が重要になってくる。例えば、学校生活において性自認に基づく制服を着ることを認めたり、履歴書の性別記入欄をなくす、などである。自分の生きやすい性別で生きることが

でき、そのことを周囲も永続的に認めている環境であれば、本研究におけるジェンダーアイデンティティの定義である「斉一性・連続性をもった主観的な自分の性別が、まわりからみられている社会的な自分の性別と一致するという感覚」を満たすことができるであろう。ジェンダーアイデンティティの不安定が性別違和感を抱える当事者の自殺念慮のリスクファクターになり得るという示唆を、今後重要視していく必要があると考える。

第四節 研究Ⅰの総合考察と研究Ⅱで明らかにすべき問題と目的

研究Ⅰでは、ASD 特性の高い者は確固たるジェンダーアイデンティティが築けず、自尊感情も低いことが示された。また、ジェンダーアイデンティティの不安定さに伴って自尊感情が低下することが示唆された。ASD 特性の高い者は、特性としての自我同一性の不安定さからジェンダーアイデンティティが不安定になっているのか、あるいは自身の特性に基づく不適応を反対の性に同一化することで理由づけしているのか、その場合は予想される性自認も、X ジェンダー(両性、無性、中性、不定性など)なのか、トランスジェンダーなのかで異なってくると考えられる。更に、ASD 群におけるジェンダーアイデンティティと非 ASD 群におけるジェンダーアイデンティティでも自我同一性の感覚も含めて異なるであろう。例えば、ASD 群における X ジェンダーの感覚と、非 ASD 群における X ジェンダーの感覚では、なぜ「X ジェンダー」という性自認を選択したのかという過程、すなわちジェンダーアイデンティティの形成過程も含めて、違いがあるのではないかと予測する。研究Ⅱでは、ASD 群から 1 名(X ジェンダー)、非 ASD 群から 1 名(X ジェンダー)の面接協力者に対してインタビュー調査を行った。ASD 特性を持つ者と持たない者のジェンダーアイデンティティの感覚とその形成過程、またその過程において伴う困難さに焦点を置き、ライフストーリー上で起きた出来事や行為、それに伴う心情を語りの中から抽出しながら、二者の異同について比較・検討することを目的とする。

第三章 研究Ⅱ

第一節 方法

(1)調査対象

研究Ⅰの Web アンケートの最終ページにてインタビュー調査の協力を依頼した。承諾して頂ける場合には名前(インタビュー時に呼ばれたい名前)とご連絡先、可能な範囲の居住地を記入して頂いた。全回答数 104 件のうち、連絡先の記入された回答数は 42 件であった。42 名の面接調査協力希望者のうち ASD 群に属する 1 名と非 ASD 群に属する 1 名をそれぞれ抽出した。抽出の際には、筆者都合ではあるが首都圏で面接が可能な居住地であることを前提とした。また、ASD 群においては AQJ の個人得点が群内平均値(37.28 点)よりも高いこと、非 ASD 群においては AQJ の個人得点が群内平均値(21.94 点)よりも低いこと、またいずれにおいても GIS の得点が群内平均(ASD 群:54.44 点、非 ASD 群:58.65 点)程度以上はあるということを条件とした。AQJ の得点については、より ASD 特性が高い者と、より ASD 特性が低い者を比較することでその異同が顕著になることを仮定して条件とした。GIS の得点については、面接ではジェンダーアイデンティティの形成過程について尋ねるので、ある程度自身のジェンダーアイデンティティを確立している必要があるためである。抽出した 2 名の詳細な概要は結果にて詳しく記述することとする。

(2)インタビュー実施前までの手続き

アンケート調査にて記入して頂いた連絡先に筆者から改めて依頼のメールを送り、インタビューの場所や日程などを調整した。面接回数は両人とも 1 回で、約 1.5～2.5 時間ほどであった。メールにて調査協力者の名前の呼び方の確認を取ってから、1 対 1 の半構造化面接によるインタビュー調査を実施した。面接において聞く必要のある質問は、事前にアンケートの自由記述項目に記入された内容を踏まえて作成した。

(3)倫理的配慮

調査協力者には①事前に回答して頂いたアンケートの内容を基に質問させて頂くこと、②インタビューでは性別違和感の発端から現在に至るまでのライフストーリーを、その時の心情を交えながら時系列的に語ってもらうこと、③ライフストーリーは図式化されるこ

と(実際の TEM 図を見てもらう), TEM 図作成後, 確認と修正の作業をお願いすること, ④インタビューは録音させていただくこと, ⑤研究目的や情報公開の範囲とプライバシー保護について, また使用を控えて欲しい情報に関しては, 申し出があり次第直ちに削除すること, ⑥アンケート調査で得られた AQJ・GIS・自尊感情の得点は論文中に記載すること, などを説明し, 同意を得た。インタビュー実施の際の場所に関しては, 個人の人生におけるセクシャルな面や公の前では言いにくい体験などについて出来る限り気兼ねなく語ってもらいたいことから, 1 対 1 の対面で第三者が周囲にいない静かな部屋を面接室として設定した。

(4) インタビュー実施後の手続き

インタビューデータの分析には, 複線経路・等至性モデル(Trajectory Equifinality Model: 以下 TEM)を用いた。インタビュー実施後は, 安田・サトウ(2012, 2017)に従って以下の手順でデータの分析処理を行い, TEM 図を作成した。①録音した音声やインタビュー時に記録したメモを元にインタビューの内容を逐語化する, ②文字データを意味のまとまりごとに分節化(切片化)する, ③切片化された内容を調査協力者が経験した順に時系列に沿って並べる, ④個別の TEM 図を作成する, ⑤2 者の TEM 図を照らし合わせ, 同じような経験を等至点として設定する, ⑥出来上がった TEM 図を各自確認してもらい, 加筆・修正を行う。

(5) 分析方法の詳細

TEM とは, 発達を点ではなくプロセスで捉えようとする発達心理学の観点から, 人間の経験を時間的変化と社会・文化的な文脈との関係で捉え, その多様な径路を記述するための質的研究の手法の一つである(吉川, 2018)。TEM は時間を捨象して外在的に扱うことをせず, ライフ(生命・生活・人生)について個人に経験された時間の流れを重視する(安田・サトウ, 2012)。安田・サトウ(2012)を参考とした吉川(2018)によると, 「非可逆的な時間の流れの中で, 個々人の歩みは多様であるが, 等しくあるいは類似した『等至点(Equifinality Point: EFP)』を経験する。その等至点に到達する間には, 各々の人生の選択や出来事があり径路が分かれていく。それを『分岐点(Bifurcation Point: BEP)』と呼び, 分岐点を経て等至点に収束すると考える。また, 選択をしながら人生の歩みを進めていく際に, 後押しとなる影響を『社会的ガイド(Social Guidance: SG)』, 阻害・抑制的に働く影響を『社会的

方向づけ(Social Direction: SD)』とし、それらによって多くの人が制度的・慣習的・結果的に経験するポイントを『必須通過点(Obligatory Passage Point: OPP)』と呼ぶ。これらの概念を用いて人生の歩みを可視化していくのが TEM である」とされる。TEM で扱うデータ数について荒川・安田・サトウ(2012)は、「1.4.9...の法則」を提唱している。同じあるいは類似の経験をした人を対象として、1 名であれば個人の経験の深みを探ることができ、4 名であれば経験の多様性を描くことができ、9 名であれば径路の類型を把握することができる」とされる。研究Ⅱでは性別違和を抱く人の心理的変容プロセスやジェンダーアイデンティティの形成過程について、身体的にセクシャルな部分や性別の違和感がもたらす生きづらさを含めた、パーソナルに深い語りを得ることを目的としているため、ASD 群、非 ASD 群から各 1 名ずつインタビュー調査を行った。

また、性別違和感を覚え始めた時点から現在までのライフストーリーを、出来事に伴う心情も踏まえて時系列的に語ることで、調査協力者にとっても意味のある気付きや振り返り、あり得た選択肢に思いを馳せる体験などが生じることを目指す。当事者研究において、違和感の程度やジェンダーアイデンティティの有り様は多様性に富んでおり、一概に全体構造を把握し、概念化できるものではないと考えられる。同じく質的研究の方法論であるメディファイド・グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)は「事例間に跨って存在する共通性や関係性を明らかにできることや、分析対象とした種々の事例を一通り説明するとともに、今後展開される類似の事例を幅広く理解・予測するための仮説や枠組みが得られる(境・中西・中坪,2012)」ことを特徴としているが、ジェンダーアイデンティティの形成という命題において多様性に富んだ当事者の人生をまとめて説明することは困難であるように思われる。したがって本研究では性別違和感を抱える個人の経験の深みを探り、その人生においてどのような経験や選択を経て現在のジェンダーアイデンティティを形成するに至ったのかについて、TEM を用いて分析していくこととする。

第二節 結果

以下、TEM 図中の行為・経験を【 】、心情を《 》とし、分岐点を下線，等至点は**太字**で表す。また実際の語りや記述の内容については「 」，筆者が意味をわかり易くするための補足を()で記すこととする。

【1.研究協力者 A さん(ASD 群)】

(1)研究協力者の概要

調査研究者 A さん(以下敬称略,20 代)は現在心理学を学んでいる大学院進学予定の大学生である。知り合って間もなく A 本人の口から自分は ASD であると筆者に伝えられた。幼少期からの身体的性別と性の認知の違和感から、身体的にも両性になりたいという両性具有願望を持っていた。筆者とは親しい関係であり、面接過程もスムーズに進んだ一方、筆者自身がそれまでの A との付き合いから来る価値観の偏りや思い込みの解釈などがないう留意する必要があった。事前のアンケートで、身体的には「女」、性自認は「中性(男女の中間にいるような感じ、どちらでもない)」と記載している。アンケートにおける各尺度の点数は、AQJ:49 点(50 点)、GIS:54 点(105 点)、自尊感情尺度:12 点(36 点)であった。インタビューで改めて性自認について尋ねたところ、「自分の性別は A(自身の名前)」 「FtM やトランスジェンダーという感覚ではない」「そもそも性が二分されているという感覚がわからない」「(自分に)性器が両方あれば完璧なのに」と述べていた。

(2)分析の結果と考察

分析の結果、図 A1~A3 の TEM 図にまとめることができた。まず 4 つの等至点それぞれに至るまでの流れを概説した後、TEM 図から明らかになったことを考察する。

①周囲とうまくコミュニケーションできないことへの気付き(等至点①)

幼稚園にいる間、A は性別についてほぼ意識することはなく、【男の子と遊ぶ】方が多かった。また【ウルトラマン人形を分解する遊び】や【閉所を作って籠る遊び】、感触のいい泥を一人でいじる遊びをすることがおこった。また【お遊戯会などの集団行動で周囲を気にしないことが多くとてもよく目立っていた】ため、「自分だけの世界を持ちながら、わけもわからないまま他人に激突していく」ような子どもであった。そんな A に対して母は「女の子らしくしなさいとか、お淑やかにできないの」と厳しく叱り付け、虐待に近い「躰」を受けていた。しかし A は悪いことをしている自覚などなく、《何故怒られるのか全く理解ができなかった》。小学校に入学し、【欲しい色のランドセルを買ってもらえなかった】ことで、A は初めて社会における男女の区別を知ることになる。発表会など

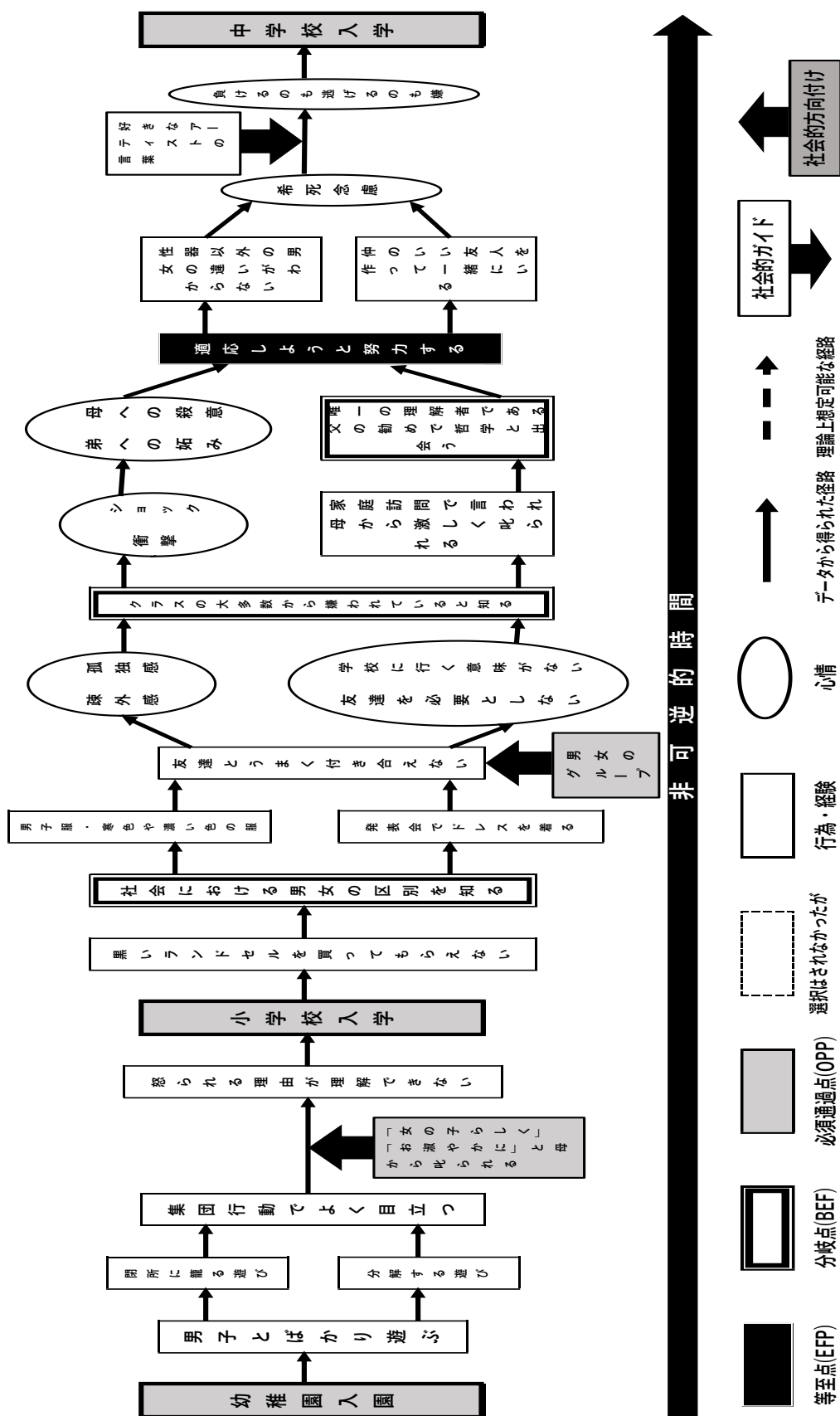
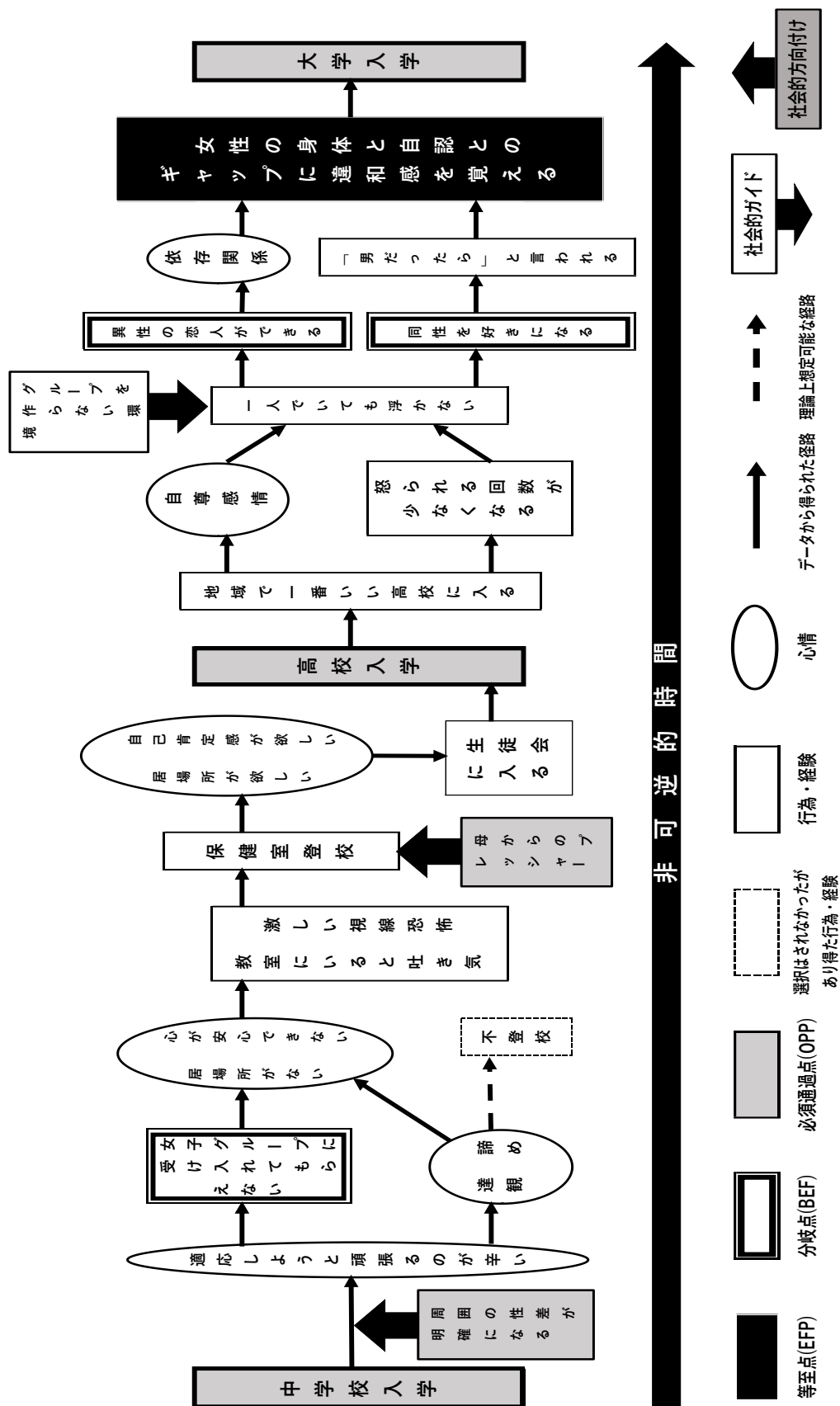


図 A1：幼稚園入園から中学校入学までの TEM 図

で強制される以外は、【濃い色や男子の服を着る】ことが許されたが、「どうしていつも好きな服を着ちゃいけないのか」納得がいかなかった。高学年になってくると男女のグループ化が進み、それまで男女共に分け隔てなく仲良くする方が合っていた A は、【同性の友達の輪に入れなくなった】。次第に《孤独感》や《疎外感》を覚え始め、「勉強なら家でもできたし、《学校に行く意味がない》と思った。自分のやりたいことに《友達を必要としなかった》」と言いつつも、周囲を見て「羨ましい」「なんでこんなにみんなとうまういかないんだろう」と思っていた。4年時に授業で「嫌われてる人投票」が行われ、クラスの大多数に自分が嫌われていることを知った。クラス全員の前で担任教師に責められるも、「自分が意地悪をしようと思ってやったことなんか一つもなかったのに、私が何の気なしにしたことで人をこんなに傷つけてしまうんだ」と激しい《衝撃》と《ショック》を受けた。【家庭訪問でもそのことを言われ、母から激しく叱られた】。それに伴い、自分と違って母から怒られない《弟への妬み》と、厳しく躰けてくる《母への殺意》が沸き起こったが、Aと同様の悩みを抱えていることから影の相談相手であり唯一の理解者であった父の勧めで哲学の本を読み始めた。「嫌われてる人投票」からは、周囲に過剰に気を配るようになり、観るのが苦手なドラマを観るなどして必死に適応しようと努力した。

②社会性とコミュニケーションの障害・身体と心のギャップに直面する(等至点②)

適応するために【仲のいい同性友人を作って一緒に学校生活を送】っていたが、小学校の卒業間際になって何故同性同士で仲良くしなければいけないのか疑問に感じ始め、【男女の違いが身体的特徴以外に理解ができなくなった】。母親から性教育を受けるものの「それも生物学上の違いであって人間としては何が違うん？」と思った。適応することの辛さ、自分の感じている性別の有り様と身体上の性別、社会での性別との違いから来る違和感から、希死念慮が生まれた。しかし「死ぬのは馬鹿がすることだ」という好きなアーティストの言葉を受けて、「死にたいけど馬鹿にはなりたくないな」と思い、《負けるのも逃げるのも嫌だった》Aは生きようとした。中学校に入り、制服の違いや男女のグループ差によって小学校の時よりも性差が明確になった。そんな環境に《適応しようと頑張るのが辛く》なり、どの女子グループにも入れなかった結果「Aとは遊ばない方がいい」と同級生に言われた。それを受けてAは「傷付くというよりも《達観》とか《諦め》。もう無理だなと思った」。泣きながら学校には通うが、《心が安心できる場所がなく》《教室にも居場所がなく》、「常に気を張り巡らしすぎてた」ために【教室にいと強い吐き気】



と「常に何千人もの人に見られている感覚」という【激しい視線恐怖】を感じるようになった。「学校に行きたくない」「死にたい」と親には話していたが、不登校になると母に叱られるというプレッシャーから、最低限【保健室登校】をすることで難を逃れていた。「母の言いなりにしていないと命すら危うかった。(従っていたのは)生存本能みたいなものだった。」過酷な状況下であっても《居場所が欲しかった》Aは、「成績が良いことしか取り柄がなかった。せめてエリートだっと思ってたかった。《自己肯定感が欲しかった》」として生徒会に入った。「母に弱い人間はダメだとずっと言われてきたから負けたくなかった。逃げるとか弱いとかがすごく嫌だった。」高校は【地域で一番の優秀な高校に入った】。そのため「もう口出しはするなと言った」結果、【怒られる回数が少なくなった】。「いいところの高校に行った」ことである程度《自尊感情》は保たれていた。高校は周囲も決まった友達を作らなかったのも、誰とつるんでも【一人でいても浮かない】環境であった。高校では異性の恋人ができたが、相手あるいは自身の《依存関係》によって長続きしなかった。異性との性交も初めて経験したが、「女の身体である以上女性役割は仕方ないと思っていたけど、本当は嫌だった」。また同性の友達を好きになり、告白したこともあったが「Aが男だったら付き合ってたと言われた」ことで上手くいかなかった。高校時代の恋愛関係で、自身の女性の身体と性自認とのギャップに違和感を覚え始めた。

③ASDであることの気付きと決断・障害の受容と自分らしさの模索(等至点③, ④)

自身を鬱病だと思っていたAは、臨床心理学を学ぶために大学に入学する。父から勧められた本の影響で、かねてより自閉症やアスペルガー障害のことは知っていたが、『『そんな馬鹿な奴いる？アスペルガーってやばいよね？』って思っていた』。ある時弟に(Aは)アスペルガーなのではないかと指摘され、改めて本を読み直し調べてみると、その特徴の多くが自分に当てはまることに気が付き、自身を ASD ではないかと疑い始める。それにより《不安》と《ショック》が強まり、友人達には相談できずに教授の元を訪ねたところ、教授の勧めにより大学の学生相談室を訪ねる。そこで簡易のテストのようなものを実施してみたところ、知的には問題はないが、衝動性とコミュニケーション不得手の特性が極めて顕著に明らかになり、ASD と ADHD の混合型であることを自覚した。その時は「ASD だったからこんなに今まで辛かったんだっていう《安心感》と、自分は普通じゃないんだっていう《絶望感》」の入り混じる複雑な心境だった。《安心感》は【小さい頃からの自分の悩みが全て ASD で説明がついてしまう】ことの気付きをもたらし、《絶

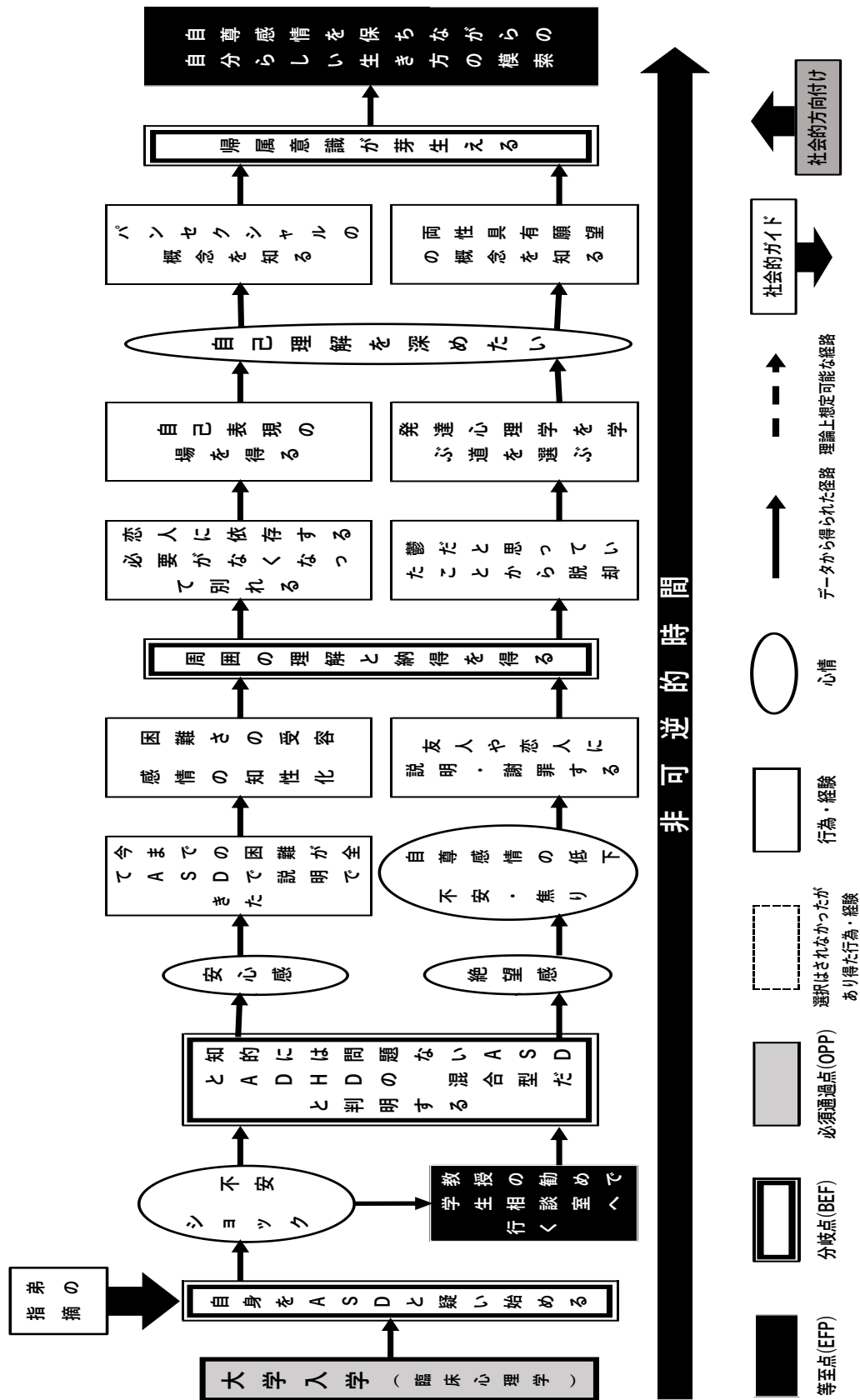


図 A3 : 大学入学から現在までの TEM 図

望感》はまさか自分が馬鹿にしていた ASD だとは思わなかったことからくる《自尊感情の低下》と、今まで周りに迷惑をかけていたんじゃないかという《不安・焦り》をもたらした。A はそれから迷惑をかけていたと思われる【友人や恋人に説明・謝罪をした】。また、父との会話の中で父もまた自分と同様に ASD なのだと思い、「私とお父さんは誰にも理解されない孤独を抱えて生きていく人なんだろうなって思って諦めた」と【困難さの受容をした】。また母との間では、「私が ASD だったからお母さんもイライラしたんだな」と思うことで今までの恨みが軽減し、【自分の感情を知性化によって収めていった】。混乱の最中であっても、A が周囲に積極的かつ誠実に働きかけていったことによって、周囲の理解と納得を得た。A は ASD だとわかったことによって【わけのわからなかった自分の居場所を恋人に依存することによって保つ必要がなくなり、別れた】。また、自身を鬱病だと思っていた頃は、鬱病は努力で治ると思って行動療法を中心に勉強していたが、「もしかすると鬱病の人は根っこに発達的な特性があって、人と違うことに悩んで鬱になる人もいるんじゃないかと思った。そうであれば、鬱を学ぶ前に発達から勉強しないと意味がないと思った」と、自ら母を説得させて【発達心理学を学ぶ道を選択した】。同時に、自分を好きになる努力の一つとして、身体的コンプレックスを武器に変えようとファッションの世界で【自己表現の場を獲得した】。こうした経験によってより《自己理解を深めたい》と思った A は、【パンセクシャル(全性愛)や両性具有願望の概念を知る】ことによって自分を重ね合わせた。そして「私の考えと同じだ、私はこれなんだと思った」ことにより帰属意識が芽生えた。現在の A は、他者との付き合いの中で円滑にいかないコミュニケーションのために下がりがちな自尊感情を保つように心がけつつも、自分らしく生きるあり方を模索している。

【2.研究協力者 B さん(非 ASD 群)】

(1)研究協力者の概要

研究協力者 B さん(以下敬称略,50 代)は筆者がアンケートの協力を依頼したコミュニティの会員の一人である。筆者とはインタビュー以前、コミュニティ会員専用の SNS にて、数度コメントのやり取りをしているが、筆者との対面はこのインタビューが初めてである。事前のアンケートにて、身体的性別は「男性」で、性自認は「男性性を内包している女性」と記載されている。現在 B は女性と結婚しており、20 代の娘を持つ。アンケートにおける各尺度の点数は、AQJ:9 点(50 点)、GIS:60 点(105 点)、自尊感情尺度:27 点(36 点)であっ

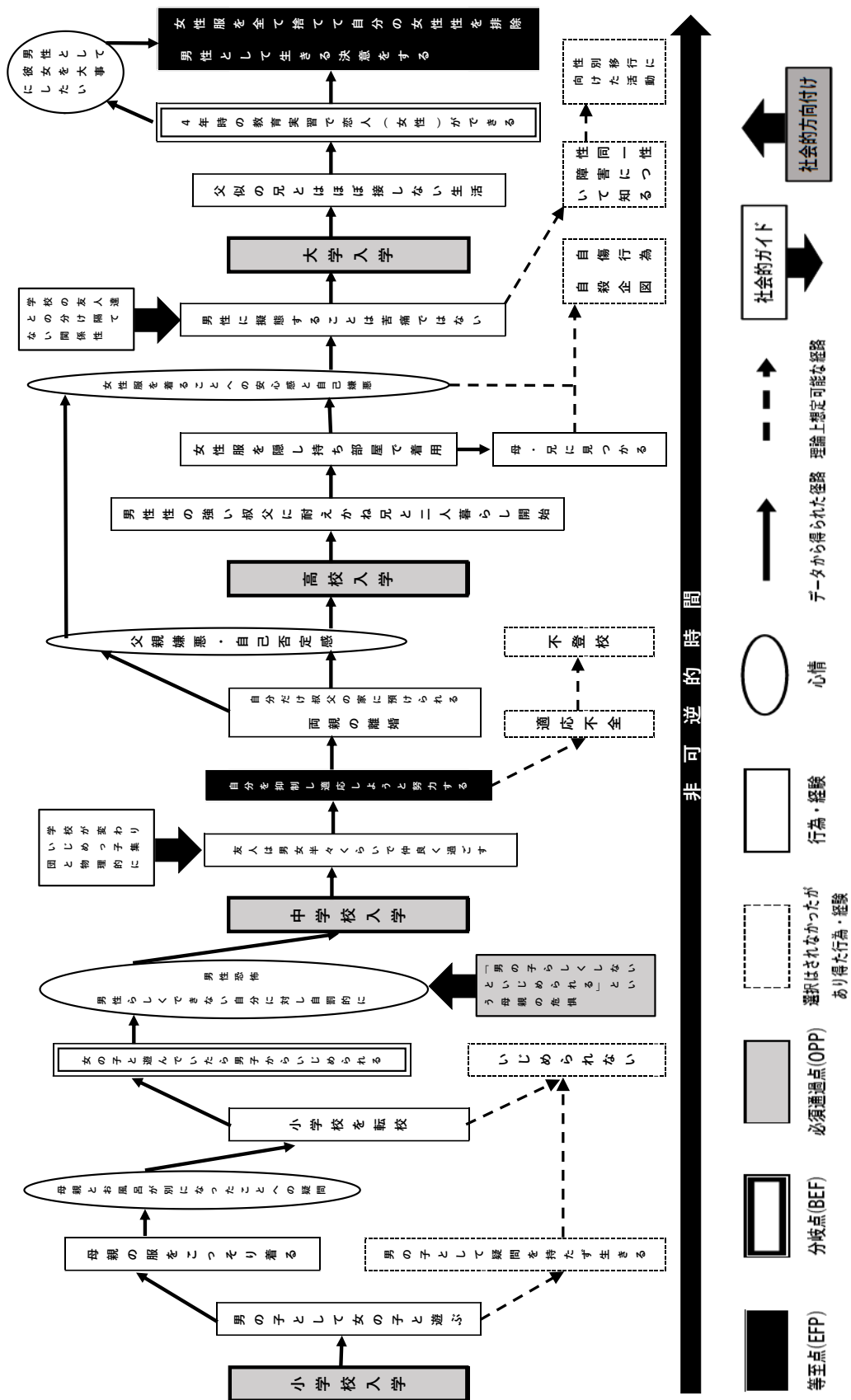
た。インタビューで改めて性自認について尋ねたところ、「自認の本質は女性であるけれども、子どもから大人になるまでそれを我慢してたので『男はこうでなきゃいけない』っていう男性的な考えとか生きる術は自分の身体の中に染み付いてしまっている感じ。(社会的には)相手や立場によって男性としての自分と女性としての自分を使い分けている」と述べていた。

(2)分析の結果と考察

分析の結果、図 B1～B4 の TEM 図にまとめることができた。まず 4 つの等至点それぞれに至るまでの流れを概説した後、TEM 図から明らかになったことを考察する。

①社会的な男女差の壁への気づき（等至点①）

B は小学校低学年時には性別に違和感を持つことなく、【男の子として女の子と遊んでいた】。ランドセルも兄のお下がりだったため色に関して特に疑問を持つことなく使っていた。自認は男子でありながらも女性の服には憧れがあり、小学 3 年生時に【母の服をこっそり着ていた】。小学 4 年時、家族旅行に行った際に《お風呂が母と別になったことに疑問を持ち始めた》。その後 B は引越しによって【小学校を転校】した。ところが引越しした先が「男女が敵対しているように」男女の区分けが顕著な学校であった。B が以前と同じように女子とも仲良くしようとしていたところ、男子からいじめられるようになった。「なんで女の子と仲良くしちゃいけないんだろう？なんで男は男としか話しちゃいけないんだろう？なんで自分はそっち(男という枠組みの中)に入れられちゃうんだろう？っていうのはその時にすごく感じ始めましたね」と語るように、B が自身の(社会的)性別に対して強く疑問を抱き、「自分は男に属しているんだから男の中に入らなきゃいけないんだ」と適応の必要性について感じ始めたのはこの出来事からであった。ところが、段々と《男性らしくできない自分に対して自罰的に》なり、男子にいじめられた経験から《男性恐怖》を感じ始めた。母は「男女関係なく人として育てるという方針の人」であったが、いじめられているという事実から、「男の子らしくしないといじめられる」と危惧し、そのように度々 B に働きかけた。B はそれに対して「お母さんのその思いには応えなきゃ、と子どもながらに思っていた」。小学校卒業後は地元の中学校に上がったが、B をいじめていた集団とは別の学校になったため物理的に距離が離れた。第二性徴が遅かったので



身体的に違和感は大きくは感じなかったが学ランを着るのは嫌だった。【友人関係は男女半々くらいで仲良くすごすことができ】、いじめられることもなかった。「せめてブレザーだったら...」と思うほど学ランがとても嫌であったが、**自分は男性なのだと違和感を抑制し、同性に適応しようと努力した**。女友達との楽しい付き合いの中で、その違和感はある程度順調に抑えることができていた。

②身体と心のギャップに戸惑いながら、同性に同一化を図る(等至点②)

その後 B は中学 3 年時に【両親の離婚】を経験する。父の女性関係の問題が原因で、家族の中で自分だけそれを知らなかったことに強い衝撃を受けた。その後【一人で叔父の家で預けられる】。B は自身が厄介な息子であるという自覚から来る負い目もあり、そのせいで自分だけ引き離されたのではないかという《自己否定感》と、女性関係の問題を引き起こしていた《父親への嫌悪感》に苛まれていた。同居を始めた【叔父が男性性のとても強い人物で、1 年程で耐えきれなくなり B は一人暮らししている兄の元で共に暮らし始めた】。高校では制服がブレザーであったためにその違和感は若干緩和された。交友関係も変わらず男女半々といった感じで、「一生懸命男として生きているつもりになっていた」。ところが、時折はそのような適応しようとしている感覚が辛くなってくるため、【女性服を買って家に隠し持ち、誰もいないときにこっそり着用していた】。実は【兄や母に見つかって】いたが、それを責めて無理矢理に修正しようとはしてこなかった。女性服を着ていることのフィット感から、《安心感と満足感》があったが、同時に「自分はおかしいんじゃないか」という《自己嫌悪》にも陥っていた。これが、過去の父親への嫌悪や拒絶感に基づくトラウマから来ているものなのだとしたら、トラウマを克服すれば女性服を着たいという気持ちはなくなるのではないかと思っていた。しかし、学校の友達とはうまくやれているし、恋愛や性愛の対象も女性であったために、「苦しいは苦しいけど、男の振りして生きていけば別に生きていけた」と語るように【男性に擬態することを苦痛とは感じなかった】。この時は、無理に頑張って気持ちに折り合いを付けて諦めていたわけではなかった。理系学部の大学に進学し、卒業までの 4 年間を引き続き兄と暮らしたが、【父に似て遊び好きの兄とはほとんど接しない生活を送っていた】。レポート漬けの忙しい大学生活であったが、【4 年時の教育実習で女性の恋人ができた】。女性と交際を始めたのをきっかけとして、《男性として彼女を大事にしたい》と思った B は、**持っていた女性服を全て捨てて自分の女性性を排除し、男性として生きる決意をした**。

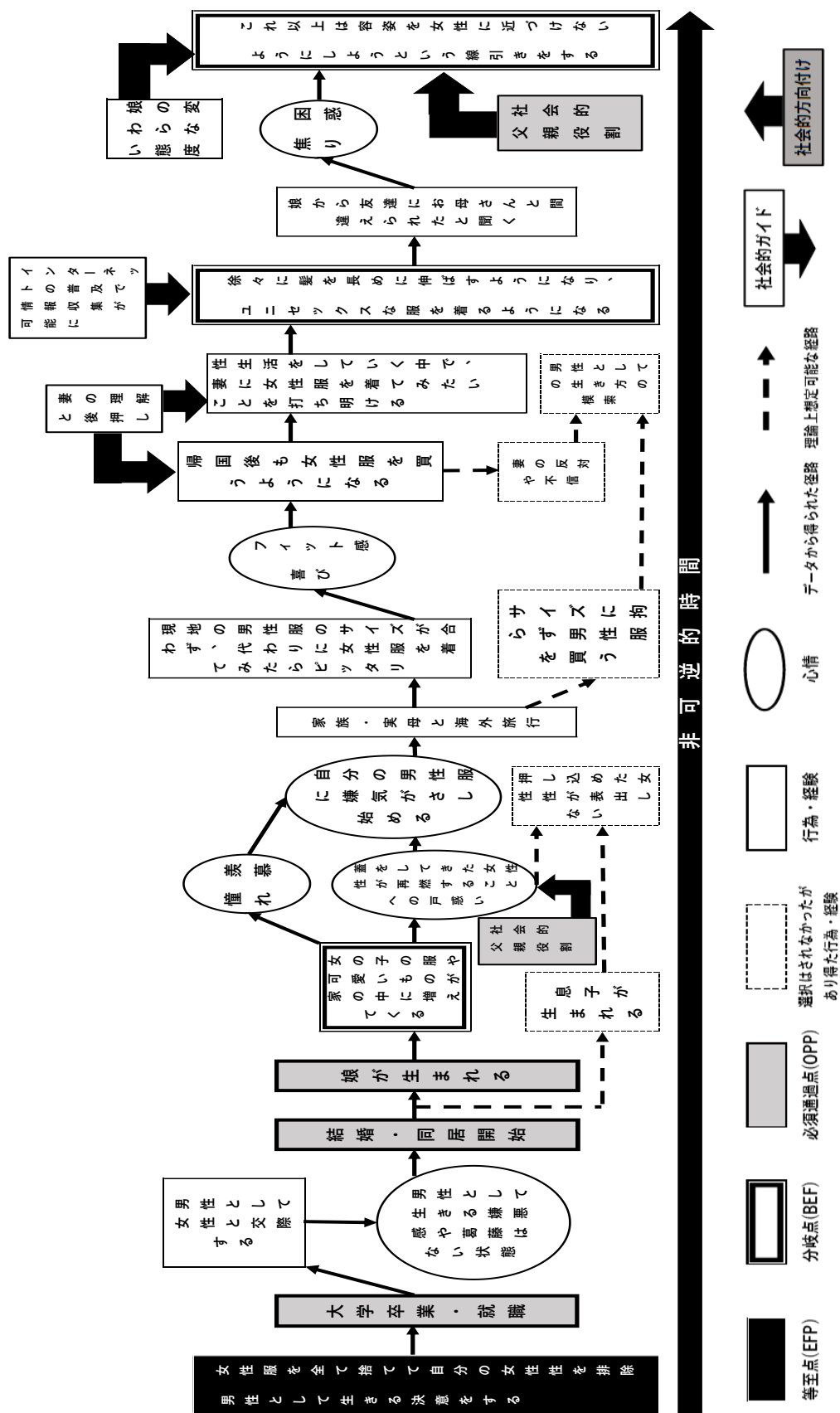


図 B2：等至点②から分岐点⑤までの TEM 図

③男性性を抑制している期間から、再びの違和感への気付きと決断(等至点③)

その後 B は大学を卒業して企業に就職し社会人となった。【女性と交際】している間、性生活においてさえも《男性として生きる嫌悪感や葛藤は生まれてこなかった》。「男性として生きる決意をしてからは、葛藤したり押し込めた女性としての自分が出てくることはなかった」と語るほど、強い圧力で自身の女性性を抑圧した B は、大学卒業の 3 年後に交際相手の女性と結婚した。その数年後に娘が誕生する。娘が幼稚園に入る歳になった頃に、B の女性性が再び顔を出し始める。【女の子の服や可愛いものが家の中に増えてくる】と、「自分は当時こんなものが欲しかったんだよねという《憧れ》」や《羨慕》を思い出し始め、段々と辛い気持ちになってくるようになった。そこで B はせっかく《蓋をしてきた女性性が再燃することへの戸惑い》に苦しむようになる。女の子の服が増えていくにつれて、《自分の男性服にも嫌気がさし始めた》。そんな矢先、【家族 3 人と実母で海外旅行へ行く】ことになる。比較的華奢な体型である B は、【現地の男性服のサイズが合わなかったため、やむを得ず女性服を着てみたところピッタリであった】。久しぶりに女性服を着た B は、その《フィット感》がとても《喜び》に感じた。「そこから段々箍が外れてきた」と、B は【帰国後も女性服を買うようになっていった】。その後の【性生活の中で、妻に女性服を着てみたいことを徐々に打ち明けるようになる】。妻はそれに対して戸惑いはしつつも反対はせず、B の気持ちの理解と後押しをしてくれた。以降は徐々に髪を長めに伸ばすようになり、ユニセックスな女性服を着るようになっていった。そんな折、娘から【娘の友達に B がお母さんと間違えられた話を聞く】。「そんなに女性的な格好してないし...これまづいのかな？ どうしよう？」と B は困惑と焦りを覚え始める。しかし娘は「どんな格好してようがパパはパパ」と変わらない態度でいてくれた。B はこの時、社会的父親役割との兼ね合いを考えて、これ以上は容姿を女性に近付けないようにしようという線引きをした。一方、【職場に男性性の強い新しい上司がやって来た】。「男なんだからそれくらいやって来い」という社会的男性像を押し付けてくる【上司からのプレッシャーに耐えられなかった B は過呼吸を起こして倒れ、3 ヶ月間休職する】ことになる。休職期間中、心理カウンセリングによる【一般的な鬱病治療】と【服薬】を行っていたが、当時は「自分の女性性が脅かされたことに原因があるとは思っていなかった」ため困難さは思うようには改善しなかった。同時に、【抗鬱薬の副作用で僅かながら胸が膨らんだ】。この時初めて、ホルモンの影響で体が変わることもあることを知った。体に変化が起きたことによって、《「体がそういう風になれるんだったら心も落ち着くのかな？」という期待》を抱くようになった。

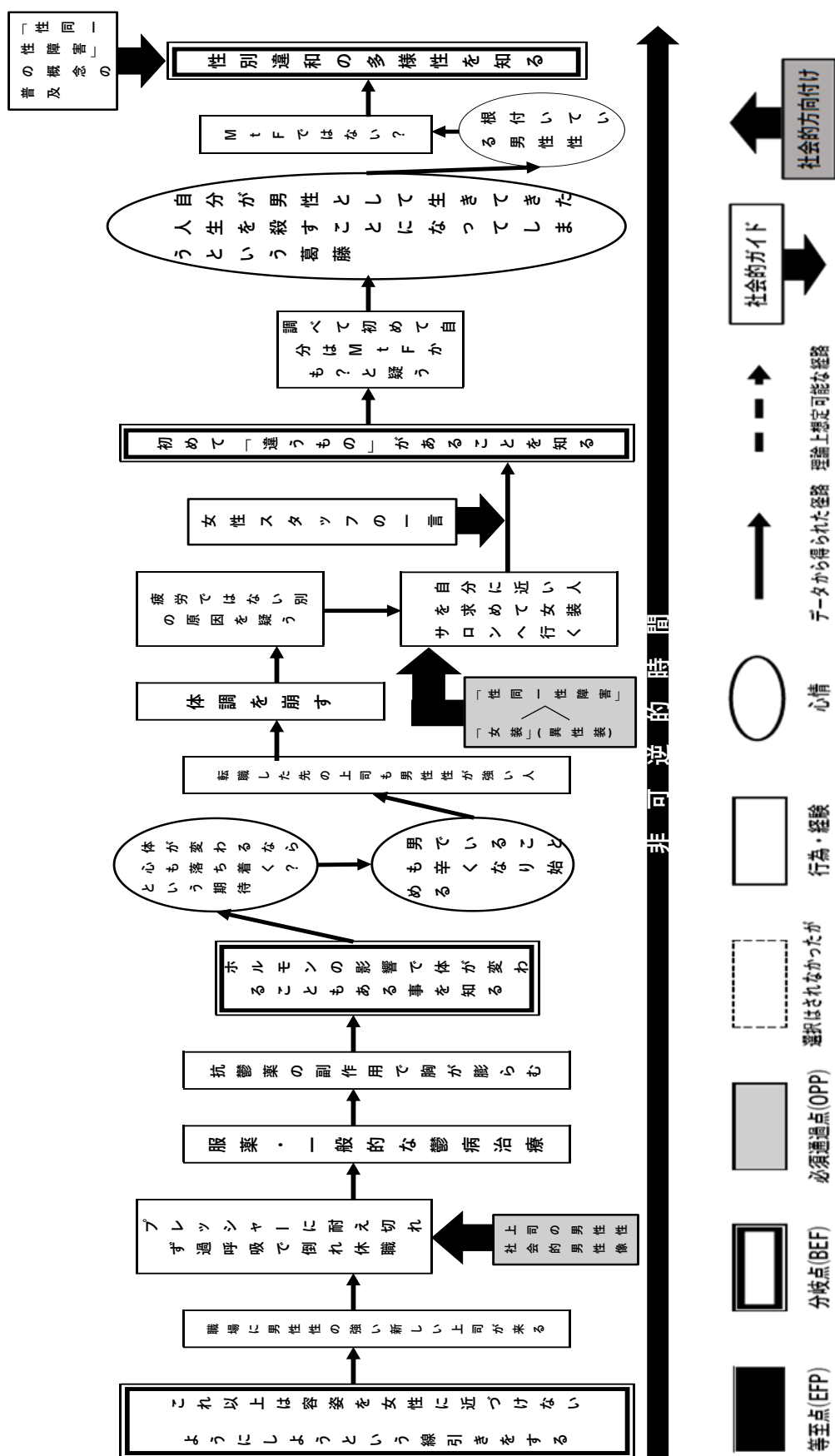


図 B3：分岐点⑤から分岐点⑧までの TEM 図

それに伴って段々と《男でいることにも息苦しさを覚え始めてきた》。その後転職をするが、その【転職先の上司もまた男性性が強い人物であった】ために再び【体調を崩した】。その時【「あれ？なんかこれ(単なる仕事疲れではなく)別に原因があるんじゃない？」と疑い】を持ち始めた。女性服を着たいという願望を持ち始めてから段々とインターネットが普及してきており、ジェンダーについての情報は調べるようになってきていたが、当時はオネエタレントの台頭もあり「性同一性障害」よりは「女装」(異性装)の概念の方が普及していたため B 自身もそうであると思っていた。そこで、【「自分と近い人に出会えるかもしれない」と思い、女装サロンを訪ねた】。ところが、そこにいた人々はあくまで性自認は男性の、異性装者であった。B はサロンの女性スタッフに、「あなた(ここに来ている人達とは)違うわよ」と言われたことで、初めて異性装とは違うもの(概念)があることを知った。そして【自分は MtF のトランスジェンダーなのかもしれないと思い始めた】。一方、自分が MtF であると認めてしまうと、《「自分が男性として生きてきた数十年間の人生を殺すことになってしまう」という葛藤もあった》。そうして調べ始めていた頃には「性同一性障害」の概念も普及し、性別違和の多様性を知っていくこととなった。同時期、海外出張に出向いた際に B は風俗のような接待に連れて行かれた。その直後、B は《親への過去の嫌悪感のフラッシュバック》を伴う激しい《不快感》と《拒絶感》に襲われた。「普通の男性なら当たり前喜んで受け入れられるものが自分にはどうしてこんなに苦しいんだろう？」という《強烈な苦痛》は、「何でそれが嫌なのかどうしても納得ができないし、あまりにも拒絶感が強くて辛いから、何でそうなるのか明らかにしたい」という思いに繋がっていき、【カウンセリングに行きたいと妻に相談した】。妻は B のその相談を受けて不安な様子であったが、「仮にそうであったとしても自分からしたら(B は)旦那さんであることに変わりはない。でも貴方が苦しいのは分かるから、行って来たら？」と許容してくれた。娘も「お父さんがどうであろうとお父さんであることに変わりはない」と B の意思を受け入れてくれた。そうして B は自身の性別の違和感と男性性への嫌悪感の根本を明らかにすることを目的として、ジェンダークリニックを受診することとなる。

④診断の受容と自分らしさの模索(等至点④)

ジェンダークリニックでは、【性同一性障害の診断の過程で過去から現在までの自分史を書き、自分の過去や内面の心情に対して時間をかけて向き合う作業をした】。すると

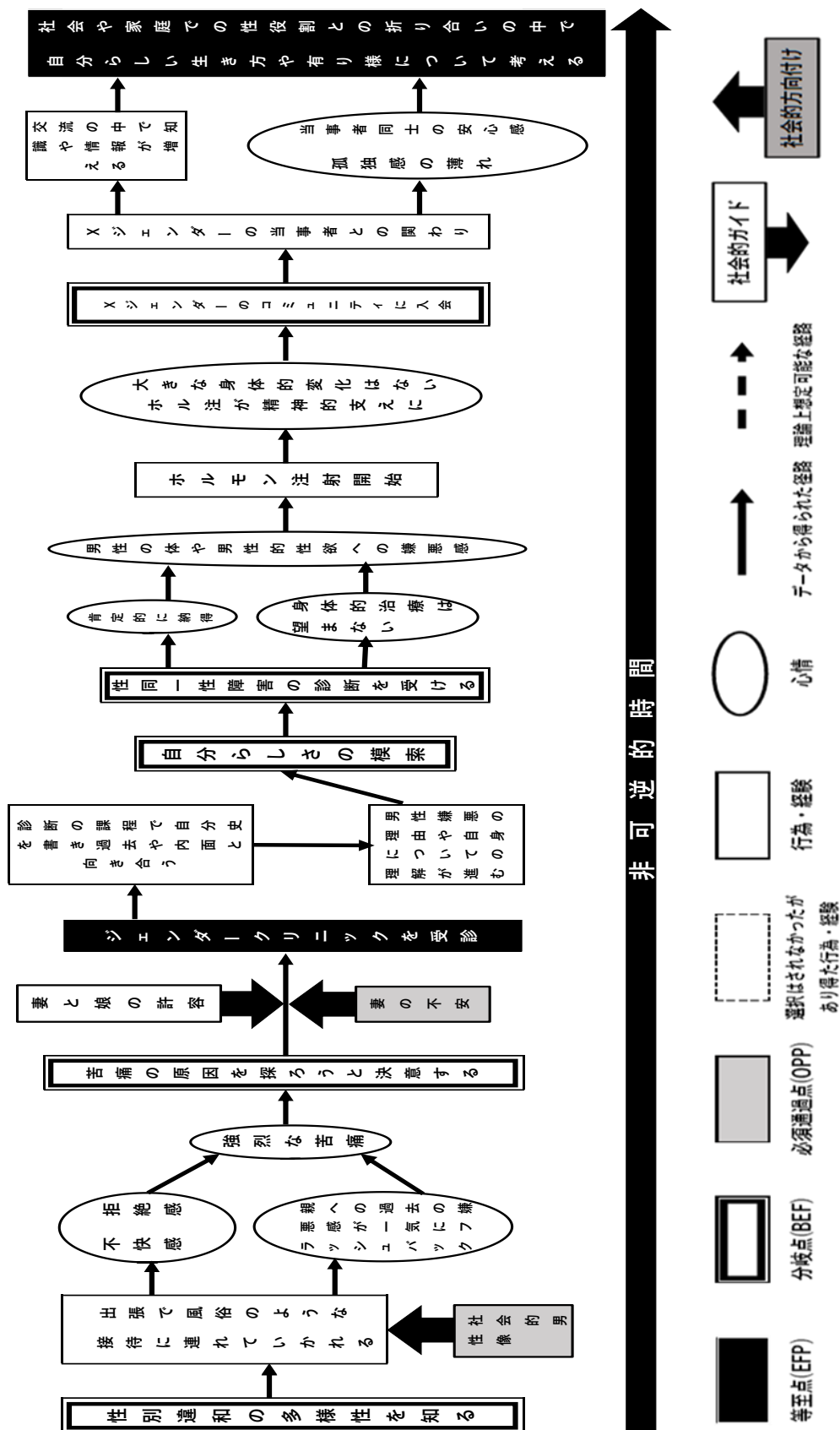


図 B4：分岐点③から等至点 4④までの TEM 図

徐々に、【男性嫌悪の理由であったり、自身の性自認についての理解をより明確にすることが出来るようになってきた】。その結果、「(社会的性や身体的性に囚われない)自分らしさってなんだろう？って考えるようになった」。結果的に、B は性同一性障害の診断を受けた。「やっぱりそうなんだ、と思った」と《肯定的に納得した》B であったが、《身体的治療(性転換手術)は望まなかった》。一方、《男性的な体や男性的な性欲には嫌悪感》があったため、診断後から【ホルモン注射を開始】した。年齢のためもあるのか《身体的変化は大きくはない》が、男性的な性欲も緩和され《精神的な支え》にはなった。「今でも妻という時はあくまで自分は夫。社会的にも男性に属するギリギリのところにいるつもり。でも、ギリギリの立ち位置でも、今は今で幸せがあるので、それをあえて崩す必要もないと思った。」B はその後【X ジェンダーのコミュニティに入会する】が、自身について「X という枠組みの中に入れてもらっている感じ。でも本質的には女性だと思っている」と語る。【X ジェンダー同士の交流の中で知識や情報が増え】、当事者の経験や自身のあり方についての語り合いから相違点や類似点を見出していくことによって《当事者同士である安心感》や《孤独感の薄れ》を経験した。職場でも女性服を着ることや男女兼用のお手洗いの使用が許されており、周囲にもそれが受け入れられている。こうして B は現在、**社会や家庭での性役割との折り合いの中で自分らしい生き方や有り様について考えていくようになった。**

【3.研究協力者 A と研究協力者 B の等至点設定の内容と比較】

A の TEM の概念表と B の TEM の概念表が以下の図 A4 と図 B5 である。

等至点①について、A は「適応しようと努力する」、B は「自分を抑制し適応しようと努力する」とした。どちらも児童期～青年期初期に起きた出来事(行為)で、周囲の環境(友人関係)における適応を目指す行為であるという点において等至点として設定した。しかし A の場合は周囲の環境に適応し、適切な社会性とコミュニケーションを獲得しようという努力である一方、B は自身のジェンダーについて異性への憧れを抑制し同性に適応しようという努力であったという違いがある。すなわち、A は ASD の特性に基づく違和感から周囲と適応しようという行為に至ったのに対し、B は性別の違和感から周囲と適応しようという行為に至ったという点で大きな違いがあると考えられる。等至点②について、A は「女性の身体と自認とのギャップに違和感を覚える」、B は「女性服を捨てて自身の

概念	本研究の位置づけ
等至点：EFP (Equifinality Point)	①自分を抑制し適応しようと努力する ②女性嫌を捨てて自分の女性性を排除，男性として生きる決意をする ③ジェンダークリニックを受診 ④社会や家庭での性役割との折り合いの中で自分らしい生き方や有り様について考える
分岐点：BFP (Bifurcation Point)	①女の子と遊んでいたら男子からいじめられる ②4年時の教育実習で恋人(女性)ができる ③女の子の服や可愛いものが家の中に増えてくる ④徐々に髪を長めに伸ばすようになり，ユニセックスな服を着るようになる ⑤これ以上は容姿を女性に近づけないようにしようという綱引きをする ⑥ホルモンの影響で体が変わることもある事を知る ⑦初めて「違うもの」があることを知る ⑧性別違和の多様性を知る ⑨苦痛の原因を探ろうと決意する ⑩自分らしさの模索・性同一性障害の診断を受ける ⑪Xジェンダーのコミュニティに入会
必須通過点：OPP (Obligatory Passage Point)	①小学校入学 ②中学校入学 ③高校入学 ④大学入学 ⑤大学卒業・就職 ⑥結婚・同居開始 ⑦娘が生まれる
社会的方向づけ：SD (Social Direction)	①男の子らしくしないといじめられるという母親の危機 ②社会的父親役割 ③上司の男性性・社会的男性像 ④「性同一性障害」<「女装」(異性装) ⑤妻の不安 ①学校が変わりいじめっ子集団と物理的に離れる ②学校の友人達との分け隔てない関係性 ③妻/娘の理解，後押し，変わらない態度，許容 ④女性スタッフの一言 ⑤「性同一性障害」の概念の普及
社会的ガイド：SG (Social Guidance)	

図 B5：B の TEM の概念表

概念	本研究の位置づけ
等至点：EFP (Equifinality Point)	①適応しようと努力する ②女性の身体と自認とのギャップに違和感を覚える ③教授の勧めで学生相談室へ行く ④自尊感情を保ちながらの自分らしい生き方の模索
分岐点：BFP (Bifurcation Point)	①社会における男女の区別を知る ②クラスの大多数から嫌われていると知る ③唯一の理解者である父の勧めで哲学と出会う ④女子グループに受け入れてもらえない ⑤異性の恋人ができる・同性を好きになる ⑥自身をASDと疑い始める ⑦知的に問題のないASDとADHDの混合型だと判明する ⑧周囲の理解と納得を得る ⑨帰属意識が芽生える
必須通過点：OPP (Obligatory Passage Point)	①幼稚園入園 ②小学校入学 ③中学校入学 ④高校入学 ⑤大学入学(臨床心理学)
社会的方向づけ：SD (Social Direction)	①「女の子らしく」「お淑やかに」と母から叱られる ②男女のグループ化 ③周囲の性差が明確になる ④母からのプレッシャー ①好きなアーティストの言葉 ②グループを作らない環境 ③弟の指摘
社会的ガイド：SG (Social Guidance)	

図 A4：A の TEM の概念表

女性性を排除，男性として生きる決意をする」とした。どちらも青年期～成人期初期に起きた出来事(行為)で，異性との恋愛において自身の身体的性と性自認あるいは社会的性との葛藤場面で起こったという点において，等至点として設定した。しかし A は自身の性別に違和感を覚えながらも，男女どちらかの性に対して同一化を図ろうという動きは見られなかった一方，B は身体的な性である男性に同一化しようと，強い意思を持った行為を行ったという点において違いが見られる。等至点③について，A は「教授の勧めで学生相談室へ行く」，B は「ジェンダークリニックを受診」とした。どちらもそれまでの人生における自身の困難さに直面し，専門機関を訪ねたという点において，等至点として設定した。しかし A は他者の指摘から自身を ASD ではないかと疑い，その判別を求める目的をもって行った行為であるのに対し，B は自身の性別の違和感の要因を探り，性同一性障害かどうかの判別を求めて行った行為であるという点において違いが見られる。等至点④について，A は「自尊感情を保ちながらの自分らしい生き方の模索」，B は「社会や家庭での性役割との折り合いの中で自分らしい生き方や有り様について考える」とした。どちらも自身の困難さを受容し，より自分らしく生きるにはどうしたらよいのかを模索するという点において，等至点として設定した。しかし A は他者との社会的な関係の中で，不適応感によって自尊感情を損ねない程度に自己表現をすることに基づく“自分らしさ”を求める行為であるが，B は社会や家庭での自身の立場に気を配り，その場に応じた性役割に適応しながら，でき得る限り性自認に従った性の“自分らしさ”を求める行為である点に注意したい。以上のように，A と B はライフストーリー上では一見すると類似の経験をしているようにも思えるが，内容を見ると A は ASD を由来とする出来事・行為である点，B は性別の違和感を由来とする出来事・行為である点を指摘する。

第三節 考察

(1) ライフストーリー上における困難さの違い

A と B のいずれも，周囲との不適応を自覚することによって気付かされた自身への違和感に基づく困難さが心情として語られることが多かった。A の語り全てを通して感じ取られる困難さは，性別の違和感から由来するものよりも ASD を由来とするものの方が大きいことがわかる。また，A は自身の困難さに直面するような出来事の直後には，時には心身症すら伴う激しい不安と自尊感情の低下を引き起こすことがわかる。その大半が，“自分

が何故そのような出来事(危機)に晒されるのか理解ができない”ことに基づくことが予想される。例えば分岐点②:「クラスの大多数から嫌われていると知る」では、どうして自分がそれ程までにクラスの友人たちに嫌われているのか見当もつかなかった。Aは原因に全く見当もつかないことで叱られたり、他者から敵意あるいは拒否の感情を向けられる経験が多くあったため、「自分は どうしてこんなにもダメな人間なんだろうと いつも思っていた」と語るように、それに伴って自尊感情も下がっていったことが考えられる。Aが周囲と適切に接することができなかったのは、ASDの特性としての社会性とコミュニケーションの障害から来るものであると考えられるが、「自分の何が悪いのかわからない」ところが、Aの自己感のなさであるとも言える。すなわち自己を客観的に見ても自己像が見えてこないものである。ASDという概念そのものには小学生の頃から出会っていたにも関わらず、自身がASDであるという疑いを持たず、弟の指摘によって自覚したことについても、客観的な自己像が見えてこないことが原因ではないだろうか。Kanner(1972)は、ASDの児童・青年の一部は、他者との感情的な接触を苦手としていながら社会的感情を持つようになること、それらの社会的感情と共に自己概念を発達させていると示唆した。ここでの社会的感情とは、Lewis et al.(1989)の述べた、罪悪感や恥といった他者との関わりによって経験される感情のことである。また菊池(2016)によるとASDの児童・青年は、対人場面において健常群よりも罪悪感や恥といった社会的感情を強く感じやすい傾向があることが示唆された。特に知的に高いASDの場合は、より強く社会的感情を感じる。Aは知的には高水準のASDであると思われるが、「自分の何が悪いのかわからない」という時点においては自己概念がない状態であった。しかし自身をASDであると自覚したことによって「(周りの人達に)絶対迷惑掛けてきたなってわかって、とりあえず身近な友達とか恋人に説明して謝った」という語りからも読み取れるように罪悪感が生じている。罪悪感という社会的感情の発露と共に、Aは自己の理解を深めていった。したがって、自分自身を説明する枠組みができたことによって、Aは自己概念、あるいは“自分らしさ”とは何かというアイデンティティ模索の一步を踏み出すことができたのではないだろうか。

一方Bは、語り全てを通して性別の違和感を由来とする困難さに直面することが多い。Bは小学生時からの女性服への憧れを起源として、一度は強い力で抑制したものの、娘の誕生をきっかけに再び女性服への憧れが発露した。男性という身体的性別のために女性らしい服を着用することは社会的に難しかったが、Bはいじめに端を発する母の危惧や社会的父親役割などの社会的方向づけを敏感に察知し、違和感を抱えつつも適応しようと努力

した。トランスジェンダー青年の性別違和感の変容過程について研究した吉川(2016)は、調査協力者である4名のうちの3名が自分を抑制し、学校生活に適応しようとしていたことを明らかにしている。吉川の研究では、3名はその直後に性差の壁に挫折感を覚え、自己否定感や不完全燃焼感を経験しているが、Bは中学・高校・大学と学校生活においては問題なく適応することができていた。これには、Bの周囲の友人関係が良好だったことも大きな一因として考えられるが、「男はこうでなきゃいけない」とB自身が語るように、社会的方向づけに基づいてBが社会的性役割について理解し、「よくないものだと思っていた」という自身の女性性を無意識下にまで抑圧し、男性性に過剰に適応することが可能であったからと考えられる。適応とは個人が属する文化・社会的環境に適合している(外的適応)状態と、幸福感や満足感を体験し心理的に安定している(内的適応)状態のバランスが取れた状態のことを指す(北村,1965)。一方過剰適応とは、「必要以上に周囲の期待に応えようとしたり、そのために過度に自己抑制的になるなど、バランスのとれた適応を通り過ぎて過剰な適応に至った状態(宮本,1989)」あるいは「適応するために、自分の感情や欲求を無理に抑え込んで、周囲に合わせている状態(中尾,2011)」と位置づけられている。Bにおいてその最たる行為が、女性服を全て捨てて自身の女性性を排除するというものであろう。Bは男性性に適応することが時折苦しくなるため、束の間の安心感を得る目的で女性服を所持していた。ところが、女性と交際するにあたり社会的男性役割により強く適応する必要性が高まり、自身の女性性を深く抑圧した。しかし、過剰適応とストレス反応・抑うつ・不安との関連が多くの研究で示唆されてきている(風間,2017)ように、過剰適応は精神的健康に対して悪影響を及ぼす可能性が考えられる。Bは抑圧した女性性が段々と現れてくるにつれ、戸惑いや苦痛を感じるようになっていった。また、職場において度々上司から押し付けられる社会的男性性に適応しようとするが耐え切れず、ストレスが過呼吸という心身症を伴って外在化した。したがって、Bの困難さの根底には性別に対する違和感が存在しているが、それに付随して社会的男性像に過剰適応してしまう心性もまた困難さを引き起こす一因であると考えられる。

(2)ジェンダーアイデンティティの感じ方の違い

AとBの両者共に、男女に二分される明確な性自認を持たないXジェンダーであるが、ジェンダーアイデンティティの内容については大きく異なる語りが得られた。Aに性自認について尋ねたところ、「そもそも性が二分されているという感覚が分からない」と語った。

身体的差異以外の男女の違いがわからないと語ることから、視覚的に認識できる男女の違いは理解し得ると考えられる。しかし、ある人間として自己も他者も認識しており、そこに男女の区別は存在しない。ASD 者は自己の不安定さから自我同一性の確立が困難であるという点については先に述べた通りであるが、自我同一性のなさに伴ってジェンダーアイデンティティの確立も困難にする可能性が考えられる。自己の不明瞭なジェンダーアイデンティティは他者にも投影され、他者も男女に二分化されない「人間」として認識される。したがって A は、そもそも自己のジェンダーアイデンティティの感覚はほとんど存在しないことが推察される。A が青年期に異性・同性のいずれにも恋愛感情を抱き、男女の性別に囚われず恋愛感情を抱くパンセクシュアル(全性愛)を性的指向として自認していることも、A 自身のジェンダーアイデンティティの感覚から説明できる。本研究では佐々木・尾崎(2007)に倣いジェンダーアイデンティティを斉一性・連続性をもった主観的な自分の性別が、まわりからみられている社会的な自分の性別と一致するという感覚と定義したが、ASD 者においては自我同一性のなさから主観的な自分の性別という認識そのものが欠けているか存在していないことが示唆されるため、他者から認識される社会的な自分の性別に関わらず、ジェンダーアイデンティティは確立されないことが推察される。しかし、A は自分自身を説明する枠組みができたことによって社会的感情を持ち、自己理解が深まったことから、Kanner(1972)に基づく自己概念が発達している可能性も考えられる。研究 I において、A の GIS 得点が ASD 群の平均点と同程度にはあったことから、ジェンダーアイデンティティが確立していないとも言い切れない。A が「自分の性別は A(自身の名前)」と語るように、男でも女でもない「A」という一人の人間としての主観的な性自認をもっていると解釈すれば、A も一定のジェンダーアイデンティティを確立していると推察することもできるだろう。

B は「もっと早くに性同一性障害に出会っていたら、性別移行するという選択肢もあったと思う」と語るように、最初から X ジェンダーとしての性自認を持っていたわけではない。女性服への憧れをきっかけとして、女性に同一性を感じていたが、社会的な男性性に適応することでそれを抑制し、長期間男性として人生を過ごしてきた。そのため B の中には男性性が色濃く根付いている。本質的には女性であるが、ある程度女性性を表に表現するようになった現在でも、それまで殻のように内部の女性性を覆い隠してきた男性性が残っているという感覚から、B は自身の性を男とも女とも区別することのできない X ジェンダーとして自認している。本研究でのジェンダーアイデンティティの定義と照らし合わせ

ると、Bは主観的な自分のジェンダーと、社会的な性別はある程度一致していると推察される。外見上においても、Bは髪が比較的長く女性服を身に着けており、場面によって性役割も使い分けているため、職場においても家庭内においてもBらしい性のあり方を自他共に認めていると考えられる。また「現状にも生活にも満足している」と語るBの性のあり方は、今後も斉一性を保ちながら連続性をもって続いていくものであると考えられる。したがって、Bはジェンダーアイデンティティを確立していると推察される。

(3)ジェンダーアイデンティティの形成過程の違い

これまでに述べたように、ASD者は自我機能が発達しない(Barrows,2008)ことから自我同一性の形成が困難なため、ジェンダーアイデンティティの確立も不確実なものとなると推測されるが、他者との関係性の中で社会的感情(罪悪感・恥など)を持つようになると、その社会的感情と共に自己概念を発達させる(Kanner,1972)ことができると示唆されている。これに則って、Aのジェンダーアイデンティティの形成過程について考察する。Aは兼ねてより自認している性別(男女のどちらともとれない)と、身体的性別・社会的性別との違いに違和感を覚えてはいたが、男女のいずれかに同一化しようとすることもなく、性という概念そのものに関する理解しがたさもあり、特に決まった主観的な性自認を持たなかった。ASDの社会性とコミュニケーションの障害から周囲の人間関係に適応できず自尊感情が下がる中、自身がASDであることを自覚したAは、困難さの原因に説明がついたことへの安心感と、周囲に迷惑を掛けていたのではないかという罪悪感が芽生えた。罪悪感という社会的感情が生まれたことにより、Aは周囲の人々に謝罪と説明という形で自分への理解を求めた。そうして他者からAへの理解が進むと共に、Aも自分を説明する枠組みができたことからより自己理解を深めたいと思うようになった。こうした自己概念の芽生えに基づき、自分は「A」という一人の人間であるという自我同一性の感覚が生まれ、付随して主観的な性別もまた「A」とあるという自認の元で形成される。以上がAの語りから推察される、Aのジェンダーアイデンティティの形成過程である。

次に、Bのジェンダーアイデンティティの形成過程について考察する。多くの場合、物心つく頃には時分の性別が男性なのか女性なのかを認識するとされている(遠藤,2016)。Bの場合は小学校の低学年頃までは男子として違和感なく生活していた。徐々に女性服への憧れが芽生え始め、女性と同一化することに安心感を覚えるようになった。また両親の離婚という経験から、父親の女性に対する行いによって強く男性性を嫌悪し、ますます女性

への同一化が強くなっていった。ところが表出し始めた女性性は、いじめをきっかけとして社会的方向づけを受け、Bが無意識の中に抑圧し、男性として適応を図るようになった。B自身の男性への適応への働きかけは異性の恋人ができたことで、「恋人を男性として大事にしたい」という思いから更に激化し、過剰適応なほど強く自身の女性性を抑え込んだ。しかし職場や家庭で社会的男性役割を担っているうちに、抑え込んでいた女性性が表出したり、脅かされたりすることによって激しい苦痛や混乱を伴うようになった。時代の流れに従って性同一性障害の概念もBの知るところとなり、自身の苦痛の原因を探りたいとしてジェンダークリニックの受診を決める。性同一性障害の診断を受けてからより自己の理解や自分らしさを考えるようになり、Xジェンダーという性自認も定まった。家族や職場への働きかけによって理解と許容を得て、主観的な性別も社会的な性別もある程度一致するというジェンダーアイデンティティを形成・獲得することができたといえる。AはASDであることを、Bは性別違和感があることを自覚してから、周囲に自身への理解を求めて働きかけた。自己の中で人生における困難さの根源を自覚し、自己理解を深め、今後の人生でも付き合っていくであろう生きづらさを受容した上で、他者にもその理解と許容を求めることによって、同一性の感覚において重要とされる「自己斉一性・連続性」と「対他的同一性」(谷,2001)を獲得できると推察される。故に、性別の違和感を抱く者がジェンダーアイデンティティを形成するためには、ASD傾向の有無に関わらず、違和感に伴う自身の困難さを自分や周囲の人々の中で理解し受容していく過程が重要となることが考えられる。ASD者は自我機能のなさから自我同一性もジェンダーアイデンティティも獲得できないと考えられたが、Aのようにジェンダーアイデンティティを比較的高水準で確立している例があるため、Kanner(1972)の示したように、社会的感情の発露が自己概念を形成し、自我同一性とジェンダーアイデンティティの確立の基盤となる可能性を推察することができよう。

第四章 総括

第一節 研究Ⅰおよび研究Ⅱの総合考察

研究Ⅰでは性別違和感と ASD との関連について調査を行い、性別違和感のない集団に比べて当事者集団の中にどの程度 ASD の特性を持つ者が含まれているのか、またジェンダーアイデンティティと自尊感情が ASD とどのように関連するのかについて明らかにすることが目的であった。研究Ⅱでは当事者のジェンダーアイデンティティの形成過程でどのような出来事・行為や心情を体験し、現在どのような性自認の中でジェンダーアイデンティティを確立しているのかについて、ASD 群と非 ASD 群との間で比較・検討することが目的であった。

性別の違和感と ASD が関連しているということは、ASD 者の中には性別(ジェンダー)の問題を併せ持つ者も少なからず存在すると推察される。性別違和感を抱える当事者であり ASD の特性も強い場合、ダブルマイノリティとして二重の生きづらさと付き合わなければならないという困難が想定される。加えて、彼・彼女らは自尊感情も低い傾向にある。ASD 者は社会性とコミュニケーションの障害のために、社会的に他者と適切な関係を築くことができず、同性集団の中にも違和感のために馴染むことができず、「これでよい」と思える自分に出会うことができない。自我同一性の感覚も希薄なために自分が何者であるかも説明ができず、自己の存在している感覚は失われ、底の見えないブラックホール (Grotstein,1989)の中に落ちていく。それに伴い彼・彼女らが強い不安と孤独感を体験しているであろうことも、推測することができる。A の GIS の回答を見てみると、自身の性別をなくしてしまったような感覚や、迷ったりわからなくなったりするような体験はないものの、自己評価がとても低く現実の社会において自分らしさを保ちながら適応していく自信がほとんどないことが見て取れる。そのような低い自己評価の中で、周囲の人間関係に気を配りながら適応しようとする姿勢に、苦悩や不安が伴うであろうことは容易に推測ができるであろう。

そのような困難に直面している最中の彼・彼女らに対して、臨床の立場では何ができるだろうか。まず、彼・彼女らの性別違和感の根源を探る必要があるだろう。ある当事者の性別の違和感の内容をよく吟味し、その苦痛の程度と自我同一性の基盤の程度、あるいは当事者の周囲の社会的環境や資源などを考慮して、適切な判断をしていく必要がある。こ

れは ASD の有無に関わらず言えることであるが、ある個人に「異性になりたい」という願望があったとして、容易に性別違和の診断や性別適合手術(SRS)を勧めてはならない。B は語りの終わりに、「女性として生きられたらなと思うこともあるけど、仮に手術して戸籍を変えていざ女性として女性の中に入って生きていこうとしたときに、本当に女性として生きられるのか？という疑問と不安はあった。得るものと失うものを天秤に掛けて考えた時に、本当にそれが幸せなのか？というのはよく吟味しなきゃいけないと思う」と述べた。これは臨床家の立場としても目指すところであるだろう。彼・彼女らの不安や孤独感に出来る限り寄り添い、性別の違和感から来る苦痛の程度と、何がその当事者個人にとって適切な介入となるのかを十分に考慮することが重要となる。

また、ASD の子ども達には、根治を目指した治療を行うのではなく、症状や行動の改善を目指した治療教育を行う(岩永,2013)。ASD 者に性別(ジェンダー)の問題が併存するという可能性を仮定するならば、治療教育において使用する教材からも、出来る限り偏ったジェンダーおよび性役割の表現が見られるものは排除すべきなのではないかと考える。例えば教材のカードやプリントに、複数人の同性の子ども達が一緒に遊んでいる場面のイラストが使われたとする。そうすると、特定の性自認を持たない ASD 児は、男の子は男の子と、女の子は女の子と遊んでいる図に違和感を覚えるかもしれない。治療教育の場で、ジェンダーや社会的な性役割を意図せず押し付け、ASD 児の違和感を喚起し混乱状態に巻き込むことは、治療教育の目的とは反するであろうと思われる。あくまで推察の域を出ないが、以上の理由から治療教育で使われる教材からはジェンダー色をできる限り排除した方が適切ではないかと考えられる。

本研究ではジェンダーアイデンティティを「斉一性・連続性をもった主観的な自分の性別が、まわりからみられている社会的な自分の性別と一致するという感覚」と定義し、性別の違和感を抱く者がジェンダーアイデンティティを形成するためには、ASD 傾向の有無に関わらず、違和感に伴う自身の困難さを自分や周囲の人々の中で理解し受容していく過程が重要となることが考えられると考察した。自己の中での困難の理解と受容の重要性については自明であるが、他者にそれを理解してもらうためには性別の違和感についてのカミングアウトの必要がある。鈴木(2018)は、(トランスジェンダーの人は)常に自分のジェンダー/セクシュアリティが適切に相手に理解されるか分からず、不安なままカミングアウトし、その結果、適切に理解されないこともあるというカミングアウトのリスクを抱えることがあると述べた。当然、多くの場合性別の違和感のないシスジェンダーである他者に、

自身の性別の違和感をカミングアウトする際は、当事者本人に緊張や不安といった大きな心的負荷が掛かることが予想される。しかしカミングアウトされる側、例えば当事者の家族を含めた身近な人々にもまた、カミングアウトに伴って大きな葛藤や混乱状態が訪れる。誕生の喜びから育児の過程を経て現在の親子・家族関係が構築されている中で、わが子やきょうだいから打ち明けられる大切な告白をどのように受け取るのか、あるいは、受け取れない想いとどのように対峙し気持ちの整理をしていくのか、という過程における葛藤は容易なものではないと思われる(吉川,2016)。また何の心の準備もないまま友だちからカミングアウトを受けたシスジェンダーの若者が、自分自身の言動で相手を傷つけてしまわないかを思い悩み、混乱してしまうケースが増えてきた(吉川,2016)。性別の違和感による困難を身近な人々に理解してもらうには、並々ならぬ障壁が存在するといえよう。本研究でインタビューに協力してくれたA・Bの両名は、友人らや家族の理解や許容がスムーズに出会ったように感じられる。そのためカミングアウトに伴う葛藤や不安とそれほど激しくは直面しなかった。Aは誠実な気持ちで周囲に謝罪・説明をし、かつ友人たちも臨床心理学を学ぶ者が多かったこともあって、AのASD特性を比較的容易に受け入れられたのではないだろうか。一方Bは家族に対して自身の性別の違和感をカミングアウトしたが、それまでの男性として、あるいは父親としてのBの存在のために「(性自認が)どうであつてもBは旦那さん(お父さん)」であるという妻や娘の許容があつてこそ、強い心的負担を感じずに家族もB本人もBの性別の違和感・性自認を受け入れることができたのではないだろうか。性別違和感を抱える当事者が必ずしも環境に恵まれるわけではない。Bは筆者とのメールのやり取りにて、「過去のいろいろな外的条件から自己肯定ができない、生きてきた自身が認められない、だから自分自身への否定？拒否？の一つとして性別の違和として現れる事があるのでは...なんて思っています。例えば、親からの否定とか...一番認めてほしい相手から認められない自分への絶望や、認められない私は私ではないという意識とか、そんなものが作用している面も少なからずある様に思います」と述べている。性別違和感が生じる原因は、胎児期の時点での遺伝子やホルモンの影響といった生物学的要因が語られることが多いが、あくまでBの語りに基づく筆者の推測ではあるが、主に両親との親子関係を軸とした、生後の外的な環境要因もある程度関わってくるのではないかと考えている。その点において、性別違和感を抱える当事者が一様に滞りなくカミングアウトを行い、すんなりと周りに受け入れられるとは考えがたい。当事者が自他共にジェンダーおよび性自認を受け入れ、双方の一致によって当事者のジェンダーアイデンティティがより

多く確立されるためにはどうすればよいだろうか。筆者は性別の違和感について偏見のない正しい知識が少しでも社会的に広く理解されることであると考え。現在も度々LGBT関連のニュースは話題に取り上げられ、政治家の不用意な発言が大いに問題になる現代の日本社会である。電通(2019)の調査で、「LGBT」という言葉の浸透率は2018年度調査で68.5%(2015年度調査：37.6%)であり、また76.0%の人が「LGBTについて正しい理解をしたい」という意向を持っていることが明らかになった。性自認だけでなく、性的指向(セクシュアリティ)を含めた大きな枠組みでの「性の多様性」について、すべての人がその線上にある(吉川,2016)ということが社会的に理解される必要があるだろう。しかし、性別の違和感や異性愛ではない性的指向を持つセクシュアル・マイノリティの当事者達が、マジョリティ側からの批判や拒絶、無関心を受け、対立してしまう構図がしばしば見受けられる。セクシュアル・マイノリティに対する批判や拒絶は、それぞれの価値観から生じるものであろう。価値観はその個人が生まれ育った文化や宗教、環境によって培われるものであるため、社会の動向がどうであったとしても容易に変容させることはできない。したがって、マイノリティ側が理解されないことを嘆くのではなく、受け入れられないとするマジョリティ側の主張との折り合いをつけられる地点を模索し、より多くの人々に「性の多様性」が理解されるような社会を形作るためになにをしたらよいかを考えるのも、心理臨床家の担うべき役割の一つになりえるのではないかと考える。

本研究ではASDと性別違和感について取り上げて検討した。ライフストーリー上で不適応感に基づく幾多の困難に直面することが予想される両者を、一方、場合によっては双方とも抱える当事者に対して、どのように理解していけばよいのか、どのような介入をしていけばよいのか、なにが彼・彼女らにとって最も困難で、最も目指すべき“その人らしさ”なのか、ということを心理臨床家は常に念頭に置いておくべきなのであらうと考える。

第二節 本研究の課題点と今後の展望

本研究では①アンケートにおいて性別適合手術(SRS)と戸籍変更の有無を問う項目を作り損ねてしまった。SRSを受け戸籍変更を既に完了している人々にとっては身体的性別と出生時に指定された性別が異なる。そのため回答者に混乱を生じさせ、結果も一部、性別移行が完了している方のデータであるのか否かという点において不明瞭であるという問題が発生してしまった。②ASDとジェンダーアイデンティティの考察において、ASD特性

としての社会性やコミュニケーションの問題から、同性の友人達との関係が上手くいかず、その不適応の理由を自己の性的属性に求め、「自分は女性/男性ではないからだ」として反対の性に同一化する、というジェンダーアイデンティティの形成過程として考えられる可能性を述べた。これを仮定すると研究Ⅱにおいて ASD のトランスジェンダー群を対象にこの仮説を明らかにしていく必要があったが、本研究では ASD の X ジェンダーの研究協力者 1 名のみにしかインタビューを依頼することができなかったため、この点について考察・検討が出来なかった。今後の研究において、ASD 群内のトランスジェンダー群および男女いずれかに二極化された特定の性自認を持たない群(≒X ジェンダー群)のジェンダーアイデンティティの形成過程を比較・検討することを課題とする。

③研究Ⅱの研究協力者 2 名の年齢が 20 代・50 代と大きく離れてしまった。そのためライフストーリーの量や濃さに差がでてしまったことで、TEM 図にして比較する際に分岐点や行為・心情の数にも差異が生じてしまった。調査協力者の抽出方法について、GIS 得点が両名とも群内平均値より高かったことと、A は AQJ 得点が ASD 群内平均値よりも高く、B は AQJ 得点が非 ASD 群内平均値よりも低かったこと、また両名とも首都圏に住んでいることを条件として選出し依頼したが、それにこだわった結果、年齢という条件については揃えることが出来なかった。20 代と 50 代という大きく離れた年齢差だったため、B は就職や結婚、子どもの誕生など、人生における大きな転換点となり得る必須通過点を A よりも多く経験していた。このことが両者の比較において大きな問題点を引き起こすことはなかったが、やはり個人のライフストーリーを比較する上では同年代であった方がより容易に、かつ明確に等至点や分岐点を見出すことができたのではないかと考えられる。

④本研究では性別違和感を抱える個人の経験の深みを探り、その人生においてどのような経験や選択を経て現在のジェンダーアイデンティティを形成するに至ったのかを探るため、TEM の「1.4.9...の法則」(荒川・安田・サトウ,2012)に則り ASD 群・非 ASD 群のそれぞれから 1 名を抽出してインタビュー調査を行った。今後は各群 9±1 名のインタビューからそれぞれのライフストーリーを統合した TEM 図を作成し、ASD 群および非 ASD 群それぞれのジェンダーアイデンティティの形成過程についてある程度の径路の類型を把握することを目的として調査を進めていきたいと思う。

文献

- 荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ.(2012).複線経路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一例, 立命館人間科学研究. **25**, pp. 95-107.
- Baird, G., Simonoff, E., Pickles, A., Chandler, S., Loucas, T., Meldrum, D., et al. (2006). Prevalence of disorders of the autism spectrum in a population cohort of children in South Thames: The special needs and autism project(SNAP). *Lancet*, **368** (9531), pp.210-215.
- Bandura, A. (1977). *Social learning theory*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.
- Daniel E. Shumer, Sari L. Reisner, Laura Edwards-Leeper, & Amy Tishelman. (2016). Evaluation of Asperger Syndrome in Youth Presenting to a Gender Dysphoria Clinic.*LGBT Health*, **3**(5). pp.387-390.
- de Vries, A.L.,Noens,I.L.,Cohen - Kettenis,P.T., et al. (2010). Autism spectrum disorders in gender dysphoric children and adolescents. *J Autism Dev Disord*, **40**. pp.930-936.
- Donald Meltzer., John Bremner., Shirley Hoxter., Doreen Weddell., & Isca Wittenberg. (1975). *EXPLORATIONS IN AUTISM: A Psycho- Analytical Study*, London, UK: . Cathy Miller Agency. (平井正三(監訳)2014,自閉症世界の探求: 精神分析的研究より. 金剛出版).
- 遠藤まめた. (2016).先生と親のための *LGBT* ガイド, 合同出版.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton & Company. (仁科弥生(訳)1977,1980. *幼児と社会 1・2*. みすず書房).
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: W. W. Norton & Company. (小此木啓吾(訳編)1973, *自我同一性-アイデンティティとライフ・サイクル*. 誠信書房).
- Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. New York: W. W. Norton & Company. (岩瀬庸理(訳)1973. *アイデンティティ*. 金沢文庫).
- Fombonne, E. (2005). Epidemiology of autistic disorder and other pervasive developmental disorder. *Journal of Clinical Psychiatry*, **66** (Suppl 10), 3-8.
- Freud, S. (1905). 性理論三篇(中山元(編訳)1997. *エロス論集*.ちくま学芸文庫).
- Freud, S. (1925). 解剖学的な性の差別の心的帰結の二三について(懸田克躬・吉村博次(訳)1969. *フロイト著作集第5巻*.人文書院).
- Grostein, J. S. (1989). The 'black hole' as the basic psychotic experience: some newer

- psychoanalytic and neuroscience perspectives on psychosis. *Journal of the American Academy of Psychoanalysis*, **6**(3). pp. 253-275.
- 針間克己.(1999). *性同一性障害の心理療法*(馬場禮子・福島章・水島恵一(編), 臨床心理学大系第 19 巻 人格障害の心理学. 金子書房).
- 針間克己.(2015). 「性同一性障害」と「性別違和」. *心と社会*, **159**, pp.109-112.
- 長谷川悠乃・松崎くみ子.(2013).性別の 3 要素からみたジェンダー・アイデンティティと自己肯定意識の状態との関連. *跡見学園女子大学文学部臨床心理学科紀要*. **1**. pp.85-105.
- 一門恵子・住尾和美・安部博史.(2008). 軽度発達障害児・者の自尊感情について:自尊感情尺度(SE 尺度)および熊大式コンピタンス尺度を用いた検討. *紀要 VISIO research reports*, **37**. pp.1-7.
- 稲垣(藤井)勉・大浦真一・松尾和弥・島義弘・福井義一.(2017). *感情心理学研究*. **25**. pp. 5-13.
- 伊藤裕子.(2001).青年期女子の性同一性の発達・自尊感情,身体満足度との関連から-.*教育心理学研究*,**49**.pp.458-468.
- 岩永竜一郎. (2013). 自閉症スペクトラム障害児の療育と支援. *日本生物学的精神医学会.*, **24**(4). pp.252-256.
- John, F. Stang., et al. (2014). Increased Gender Variance in Autism Spectrum Disorders and Attention Deficit Hyperactivity Disorder. *Archives of Sexual Behavior.*, **43**. pp.1525-1533.
- 株式会社電通.(2019).電通ダイバーシティ・ラボが「LGBT 調査 2018」を実施 : LGBT 層に該当する人は 8.9% , 「LGBT」という言葉の浸透率は約 7 割に .
<http://www.dentsu.co.jp/news/release/pdf/cms/2019002-0110.pdf>. (2019 年 1 月 17 日取得)
- Kanner, L., Rodriguez, A., & Ashenden, B. (1972). How far can autistic children go in matters of social adaptation?.*Journal of Autism and Childhood Schizophrenia*, **2**. pp.9-33. (十亀史郎・斉藤聡明・岩本憲(訳)2001, *幼児自閉症の研究*, 黎明書房).
- Kate Barrows. (2008). *Autism in Childhood and Autistic Features in Adults: A Psychoanalytic Perspective*, London, England: H. Karnac (Books) Ltd. (平井正三・世良洋(監訳)2016, *自閉症スペクトラムの臨床 : 大人と子どもへの精神分析的アプローチ*, 岩崎学術出版社).

- 川崎聡大・荻布優子.(2018).自閉症スペクトラム障害における感覚過敏の生理・病理学的背景-聴覚情報処理に着目して-, *奈良大学紀要*, **9**. pp. 59-63.
- 風間惇希.(2017). 青年期における過剰適応研究の動向と今後の課題. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, **64**. pp. 127-140.
- 木部則雄.(2009).アスペルガー障害の芸術的創造性 - ヘンリー・ダーガーの精神分析的理解 - .白百合女子大学研究紀要, **45**.pp.105-129.
- 木部則雄.(2016). 自閉スペクトラム症のこころの発達: パーソナリティ障害との架け橋(福本修・平井正三(編著)2016. *精神分析から見た成人の自閉スペクトラム*. 誠信書房).
- 菊池春樹.(2016). 自閉症スペクトラムの児童・青年における罪悪感と恥について.東京成徳大学研究紀要—人文学部・応用心理学部—, **23**. pp.59-72.
- 北村晴朗.(1965). *適応の心理*. 誠信書房.
- 北添紀子・藤田尚文・寺田信一・是永かな子・泉本雄司・植田味佐.(2009). 大学生における自閉症スペクトラムの調査—The Autism-Spectrum Quotient 結果の分析—. *LD 研究*, **18**. pp.66-71.
- Kohlberg, L. (1966). *A cognitive-developmental analysis of children's sex role concepts and attitude*. In E. E. Maccoby (ed.), *The development of sex differences*, Stanford, Calif.: Stanford University Press. (池上千寿子・河野貴代美(訳)1979. *性差 その起源と役割*. 家政教育社).
- 小島道生.(2018).自閉スペクトラム症者の自尊感情と主観的幸福感. *LD 研究*, **27**(4).pp.491-499.
- 康純.(2017). *性別に違和感がある子どもたち:トランスジェンダー・SOGI・性の多様性*, 合同出版.
- 栗田広,長田洋和,小山智典,金井智恵子,宮本有紀,志水かおる.(2003).自閉性スペクトル指数 日本版(AQ-J)の信頼性と妥当性.*臨床精神医学*, **32**(10).pp.1235-1240.
- 栗田広,長田洋和,小山智典,金井智恵子,宮本有紀,志水かおる.(2004).自閉性スペクトル指数 日本版(AQ-J)のアスペルガー障害に対するカットオフ.*臨床精神医学*, **33**(2). pp.209-214.
- label X.(2016). *X ジェンダーって何?: 日本における多様な性のあり方*,緑風出版.
- Lewis, M., Sullivan, M., Stanger, C.,& Weiss, M.(1989). Self development and self conscious emotions. *Child Development*, **60**. pp. 146-156.
- 松木邦裕.(1997). *摂食障害の治療技法—対象関係論からのアプローチ—*, 金剛出版.

- 松並知子・西尾亜希子.(2018). 女子大学生のキャリアプラン選択の規定要因—稼得意識, 進路選択に対する自己効力, 自尊感情, 職業観—. *女性学評論*, **32**, pp. 25-52.
- Mischel, W. (1966). A social learning view of sex differences in behavior. In E. E(ed.), *The development of sex behavior*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Mischel, W. (1970). Sex-typing and socialization. In P. Mussen(ed.), *Carmichael's manual of child psychology*(vol.2). New York: Willy.
- 宮本忠雄.(1989). 過剰適応—不適応のすすめ—. *青年心理*, **76**, pp.37-40.
- Money, J. (1965). *Sex Research:New Developments*.Holt, Rinehart and Winston, New York.
- Money, J. & Tucker, P. (1975). *Sexual signatures: on being a man or a woman*. Little, Brown & Company. (朝山新一ほか(訳)1979. 性の署名 : 問い直される男と女の意味. 人文書院).
- 中尾和久.(2011). 過剰適応, *現代精神医学事典*. 弘文堂.
- 中塚幹也.(2013).学校の中の「性別違和感」を持つ子ども : 性同一性障害の生徒に向き合う, JSPS 日本学術振興会科学研究費助成事業 23651263 挑戦的萌芽研究 学校における性同一性障害の子どもへの支援法の確立に向けて, pp.1-46.
- 中塚幹也.(2017). 封じ込められた子ども, その心を聴く : 性同一性障害の生徒に向き合う, ふくろう出版.
- 並川努.(2018).日本における Rosenberg 自尊感情尺度の使用状況について.*創生ジャーナル Human and Society*, **1**, pp.79-84.
- 大山治彦.(1995).身体の男らしさ・女らしさと自尊感情の関連について.*家族社会学研究*, **7**, pp.69-79.
- Perry, G. & Bussey, K. (1979). The social learning theory of sex difference : Imitation is alive and well. *Journal of Personality & Social Psychology*, **37**, 1699-1712
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Prinston University Press.
- 境愛一郎・中西さやか・中坪史典.(2012).子どもの経験を質的に描き出す試み— M-GTA と TEM の比較—.*広島大学大学院教育学研究科紀要*,**61**(3),pp.197-206.
- 佐々木掌子.(2006).ジェンダー・アイデンティティと教育-性的自己形成における遺伝と環境-.*哲学*,**115**,pp.305-336.
- 佐々木掌子・尾崎幸謙.(2007).ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成.パーソナリティ

- 研究,15(3).pp.251-265.
- 佐々木掌子.(2017).トランスジェンダーの心理学:多様な性同一性の発達メカニズムと形成, 晃洋書房.
- S, Spensley. (1995). *Frances Tustin*. London. Amember of the Taylor & Francis Group.
(井原成男ほか(訳)2003. タスティン入門: 自閉症の精神分析的探求.岩崎学術出版社).
- Stoller, R. J. (1964). A contribution to the study of gender identity. *The International Journal of Psycho-analysis*,45. pp.220-226.
- 杉山登志郎.(2005).アスペルガー症候群と高機能自閉症.学習研究社.
- 鈴木綾.(2018).FTM トランスの「カミングアウト」における, 可視化と受容のポリティクス. 岩手大学大学院人文社会科学部研究紀要, 27. pp.35-54.
- 高橋純一・行場次朗・山脇望美.(2012).健常者における自閉症スペクトラム指数と視覚的短期記憶容量.日本認知心理学会発表論文集. 58.
- 谷冬彦.(2001).青年期における同一性感覚の構造——多次元自我同一性尺度(MEIS)の作成——. 教育心理学研究, 49. pp.265-273.
- 鑓幹八郎.(2002).アイデンティティとライフサイクル論(鑓幹八郎著作集 I). ナカニシヤ出版.
- 館農勝・池田官司・斎藤利和.(2011).広汎性発達障害における性別違和に関する検討.精神神経学雑誌,113(12). pp.1173-1183.
- 内田利広・福本絃未.(2015).大学生の社会的自己制御と適応感の関連:自尊心と被受容感における特徴から.京都教育大学紀要, 127. pp.119-131.
- 若林明雄・東條吉邦・Simon Baron-Cohen・Sally Wheelwright.(2004).自閉症スペクトラム指数(AQ)日本語版の標準化-高機能臨床群と健常成人による検討-. 心理学研究,75(1).pp.78-84.
- Wing, L. (1996). *The Autistic Spectrum: A Guide for Parents and Professionals*. London: Constable. (久保絃章・佐々木正美・清水康夫(監訳)1998, 自閉症スペクトル: 親と専門家のためのガイドブック. 東京書籍).
- 八木成和.(2016).男子大学生の大学生活への適応に関する研究:対人関係の困り感と適応感, 自尊感情との関連. 四天王寺大学紀要, 62. pp.163-173.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子.(1982).認知された自己の諸側面の構造.教育心理学研究,30.pp.64-68.

- 安田裕子・サトウタツヤ.(2012).*TEM* でわかる人生の径路-質的研究の新展開-, 誠信書房.
- 安田裕子・サトウタツヤ.(2017).*TEM* でひろがる社会実装：ライフの充実を支援する, 誠信書房.
- 吉川麻衣子.(2016).心理臨床領域における「性の多様性」に関する課題と展望:2010 年以降の研究動向をもとに.*沖縄大学人文学部紀要*, **18** .pp.25-40.
- 吉川麻衣子.(2018).トランスジェンダー青年が抱く性別違和感の思春期・青年期における変容過程：複線経路・等至性モデル(TEM)による分析.*沖縄大学人文学部紀要*, **20**. pp.1-16.
- 吉村健.(2017).大学生の自尊感情におけるジェンダー・アイデンティティの影響.*京都教育大学教育実践研究紀要*, **17**. pp. 125-135.
- 湯川隆子・石田勢津子.(2004).ジェンダー認知の変容とその測定方法の検討.*奈良大学紀要*,**33**.pp.81-93.

性別に対するアイデンティティと個人の持つ特性に関するアンケート調査

本アンケートに足を運んで下さり、誠にありがとうございます。

このアンケートは約15～30分程度でご回答頂くものになっております。
かなり長いアンケートですので、お時間に余裕のある際にご回答頂きますと幸いです。

質問の内容は、あなたが普段日常生活をどのように送っているかや、他者との関係における取り組み方・姿勢、ご自身の性別に対するお気持ちやお考え、ご自身のことをどう思っているか、などで構成されています。ご自身のことや性別についてよく考えなければならない項目が多くありますので、嫌な気持ちになったり考えるのが苦しくなったりしたときは直ちにご回答を中断して頂いて構いません。

似たような質問が複数含まれている場合がありますので、読み落としがないようによく読んで注意してください。

選択式の質問のご回答後、ご自身の性自認等についてお伺いする記入式の項目がございます。回答の有無は自由です。お時間やご自分のお気持ちに差し支えない範囲で構いませんので、よろしければそちらにもご回答をお願いいたします。

なお、この調査はあなたのプライバシーを侵害したり、あなたの性別や性格について非難したり、またそれらを個別に測定することを目的とした調査ではありません。また性的指向を問う質問もございません。質問に対するご回答は各質問群ごとに集計され、全て匿名のものとして扱います。調査終了後は個人が特定できないような細心の配慮の上、適切に処分されます。調査結果全般について開示をご希望の場合には以下の連絡先までお問合せ下さい。個別の調査結果につきましてはご回答頂いた方ご本人様からのお問合せである場合であっても、お答えできかねますのでご了承ください。

その他、ご不明点やご意見等がございましたら、以下のメールアドレスまでご連絡くださいますよう、お願い申し上げます。

〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘1丁目25
白百合女子大学大学院 発達心理学研究室
調査者:文学研究科 発達心理学専攻 脇 優花(わき ゆうか)
(E-mail)20th.century.371@gmail.com

***必須**

ご所属(会社員、学生など可能な範囲で結構です) *

回答を入力

ご年齢 *

☐ 10代

☐ 20代

☐ 30代

☐ 40代

☐ 50代

☐ 60代

☐ その他: _____

ご性別(身体的性、性自認など差支えない範囲で詳細にご記入をお願い致します) *

回答を入力

次へ

1/9 ページ

Google フォームでパスワードを送信しないでください。

第1群

第1群は4段階(1.あてはまる、2.どちらかというにあてはまる、3.どちらかというにあてはまらない、4.あてはまらない)の評定で構成されています。最もご自分にあてはまると思う箇所にチェックを入れてお答えください。第1群の質問は全部で50項目です。全て必須項目になります。

1.何かをするときには、一人でするよりも他の人と一緒にする方が好きだ。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

2.同じやり方を何度もくりかえし用いることが好きだ。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

3.何かを想像するとき、映像(イメージ)を簡単に思い浮かべることができる。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

4.ほかのことが全然気にならなくなる(目に入らなくなる)くらい何かに没頭してしまうことがよくある。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

5.ほかの人が気がつかないような小さい物音に気がつくことがよくある。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

6.車のナンバーや時刻表の数字などの一連の数字や、特に意味のない情報に注目する(こだわる)ことがよくある。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

7.自分ではていねいに話したつもりでも、話し方が失礼だと周囲の人から言われることがよくある。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

8.小説などの物語を読んでいるとき、登場人物がどのような人か(外見など)について簡単にイメージすることができる。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

9.日付についてのこだわりがある。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

10.パーティーや会合などで、いろいろな人の会話についていくことが簡単にできる。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

11.自分がおかれている社会的な状況(自分の立場)がすぐにわかる。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

12.ほかの人は気がつかないような細かいことに、すぐに気づくことが多い。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

13.パーティーなどよりも、図書館に行く方が好きだ。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

14.作り話には、すぐに気がつく(すぐわかる)。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

15.モノよりも人間の方に魅力を感じる。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

16.それをする事ができないとひどく混乱して(パニックになって)しまうほど、何かに強い興味を持つことがある。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

17.ほかの人と、雑談などのような社交的な会話を楽しむことができる。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

18.自分が話をしているときには、なかなかほかの人に横から口をはさませない。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

19.数字に対するこだわりがある。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

20.小説などを読んだり、テレビでドラマなどを観ているとき、登場人物の意図をよく理解できないことがある。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

21.小説のようなフィクションを読むのは、あまり好きではない。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

22.新しい友人を作ることは、むずかしい。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

23.いつでも、ものごとの中に何らかのパターン(型や決まりなど)のようなものに気づく。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

24.博物館に行くよりも、劇場に行く方が好きだ。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

25.自分の日課が妨害されても、混乱することはない。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

26.会話をどのように進めたらいいのか、わからなくなってしまうことがよくある。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

27.誰かと話をしているときに、相手の話の'言外の意味'を理解することは容易である。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

28.細部よりも全体像に注意が向くことが多い。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

29.電話番号を覚えるのは苦手だ。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

30.状況(部屋の様子やものなど)や人間の外見(服装や髪形)などが、いつもとちょっと違うくらいでは、すぐに気が付かないことが多い。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

31.自分の話を聞いている相手が退屈しているときには、どのように話をすればいいかわかっている。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

32.同時に2つ以上のことをするのは、かんたんである。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

33.電話で話をしているとき、自分が話をするタイミングがわからないことがある。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

34.自分から進んで何かをすることは楽しい。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

35.冗談がわからないことがよくある。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

36.相手の顔を見れば、その人が考えていることや感じていることがわかる。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

37.邪魔が入って何かを中断されても、すぐにそれまでやっていたことに戻ることができる。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

38.人と雑談のような社交的な会話をすることが得意だ。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

39.同じことを何度も繰り返していると、周囲の人からよく言われる。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

40.子どものころ、友達といっしょに、よく'〇〇ごっこ(ごっこ遊び)'をして遊んでいた。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

41.特定のものについての(車について、鳥について、植物についての
のような)情報を集めることが好きだ。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

42.あること(もの)を、ほかの人がどのように感じるかを想像するのは
苦手だ。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

43.自分がすることはどんなことでも慎重に計画するのが好きだ。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

44.社交的な場面(機会)は楽しい。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

45.ほかの人の考え(意図)を理解することは苦手だ。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

46.新しい場面(状況)に不安を感じる。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

47.初対面の人と会うことは楽しい。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

48.社交的である。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

49.人の誕生日をおぼえるのは苦手だ。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

50.子どもと'○○ごっこ'をして遊ぶのがとても得意だ。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

第2群

第2群に入る前に、あなたの性自認についてお伺いします。ご自身に最もあてはまるものを以下の3つから選んでチェックしてください。性自認とはご自身で意識、認識している性のことを指します。

あなたの性自認を教えてください。★

- ☐ 女性
- ☐ 男性
- ☐ 両性またはどちらでもない

戻る

次へ

3/9 ページ

Google フォームでパスワードを送信しないでください。

※このページで

- ・「女性」を選択した場合は第2群(A)→第3群へ
- ・「男性」を選択した場合は第2群(B)→第3群へ
- ・「両性またはどちらでもない」を選択した場合は第2群(C)→第3群へ

回答によって種類の異なる第2群にそれぞれ分岐するように設定されている。

第2群(A)

以下は前頁で性自認を「女性」と回答された方にご回答頂く項目です。第2群は7段階(1.非常にあてはまる、2.かなりあてはまる、3.どちらかというにあてはまる、4.どちらともいえない、5.どちらかというにあてはまらない、6.かなりあてはまらない、7.全くあてはまらない)の評定で構成されています。最もご自分にあてはまると思う箇所にチェックを入れてお答えください。第2群の質問は全部で16項目です。全て必須項目になります。

1.過去において、自分の性別に自信がもてなくなったことがある。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

2.自分が女性として望んでいることがはっきりしている。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

3.現実の社会の中で、女性として自分らしい生き方ができると思う。

*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

4.過去において、自分の性別をなくしてしまったような気がする。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

5.自分が女性としてどうなりたいのかははっきりしている。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

6.現実の社会の中で、女性として自分らしい生活が送れる自信がある。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

7.いつからか自分の性別がわからなくなってしまったような気がする。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

8.自分が女性としてすべきことが、はっきりしている。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

9.人に見られている自分の性別と本当の自分の性別は一致していないと感じる。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

10.現実の社会の中で、女性として自分の可能性を充分に実現でき
ると思う。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあては まる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまら ない

11.今のままでは次第に自分の性別がわからなくなっていくような気
がする。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあては まる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまら ない

12.女性としての自分は、人には理解されないだろう。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあては まる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまら ない

13.女性として自分らしく生きてゆくことは、現実社会の中では難しい
だろうと思う。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあては まる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまら ない

14.自分の性別に迷いを感じることもある。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあては まる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまら ない

15.人前での自分の性別は、本当の自分の性別ではないような気がする。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

16.あなたの身体的な性別(生まれた時に割り当てられた性別)は次のどれですか。*

- ☐ 女性
- ☐ 男性
- ☐ 間性(インターセックス)

戻る

次へ

4/9 ページ

Google フォームでパスワードを送信しないでください。

第2群(B)

以下は前頁で性自認を「男性」と回答された方にご回答頂く項目です。第2群は7段階(1.非常にあてはまる、2.かなりあてはまる、3.どちらかというにあてはまる、4.どちらともいえない、5.どちらかというにあてはまらない、6.かなりあてはまらない、7.全くあてはまらない)の評定で構成されています。最もご自分にあてはまると思う箇所にチェックを入れてお答えください。第2群の質問は全部で16項目です。全て必須項目になります。

1.過去において、自分の性別に自信がもてなくなったことがある。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

2.自分が男性として望んでいることがはっきりしている。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

3.現実の社会の中で、男性として自分らしい生き方ができると思う。

*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

4.過去において、自分の性別をなくしてしまったような気がする。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

5.自分が男性としてどうなりたいのかははっきりしている。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

6.現実の社会の中で、男性として自分らしい生活が送れる自信がある。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

7.いつからか自分の性別がわからなくなってしまったような気がする。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

8.自分が男性としてすべきことが、はっきりしている。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

9.人に見られている自分の性別と本当の自分の性別は一致していないと感じる。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

10.現実の社会の中で、男性として自分の可能性を充分に実現でき
ると思う。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあては まる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまら ない

11.今のままでは次第に自分の性別がわからなくなっていくような気
がする。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあては まる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまら ない

12.男性としての自分は、人には理解されないだろう。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあては まる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまら ない

13.男性として自分らしく生きてゆくことは、現実社会の中では難しい
だろうと思う。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあては まる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまら ない

14.自分の性別に迷いを感じることもある。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあては まる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまら ない

15.人前での自分の性別は、本当の自分の性別ではないような気がする。★

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

16.あなたの身体的な性別(生まれた時に割り当てられた性別)は次のどれですか。★

- ☐ 女性
- ☐ 男性
- ☐ 間性(インターセックス)

戻る

次へ

5/9 ページ

Google フォームでパスワードを送信しないでください。

第2群(c)

以下は前頁で性自認を「両性またはどちらでもない」と回答された方にご回答頂く項目です。第2群は7段階(1.非常にあてはまる、2.かなりあてはまる、3.どちらかというにあてはまる、4.どちらともいえない、5.どちらかというにあてはまらない、6.かなりあてはまらない、7.全くあてはまらない)の評定で構成されています。最もご自分にあてはまると思う箇所にチェックを入れてお答えください。第2群の質問は全部で15項目です。全て必須項目になります。

1.過去において、自分の性別に自信がもてなくなったことがある。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

2.自分が両性またはどちらでもないとして望んでいることがはっきりしている。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

3.現実の社会の中で、両性またはどちらでもないとして自分らしい生き方ができると思う。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

4.過去において、自分の性別をなくしてしまったような気がする。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

5.自分が両性またはどちらでもないとしてどうなりたいのかはっきりしている。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

6.現実の社会の中で、両性またはどちらでもないとして自分らしい生活が送れる自信がある。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

7.いつからか自分の性別がわからなくなってしまったような気がする。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

8.自分が両性またはどちらでもないとしてすべきことが、はっきりしている。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

9.人に見られている自分の性別と本当の自分の性別は一致していないと感じる。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

10.現実の社会の中で、両性またはどちらでもないとして自分の可能性を充分に実現できると思う。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

11.今のままでは次第に自分の性別がわからなくなっていくような気がする。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

12.両性またはどちらでもないとしての自分は、人には理解されないだろう。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

13.両性またはどちらでもないとして自分らしく生きてゆくことは、現実社会の中では難しいだろうと思う。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

14.自分の性別に迷いを感じることもある。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

15.人前での自分の性別は、本当の自分の性別ではないような気がする。*

	1	2	3	4	5	6	7	
非常にあてはまる	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	全くあてはまらない

16.あなたの身体的な性別(生まれた時に割り当てられた性別)は次のどれですか。*

- ☐ 女性
- ☐ 男性
- ☐ 間性(インターセックス)

戻る

次へ

6/9 ページ

Google フォームでパスワードを送信しないでください。

第3群

第3群は4段階(1.あてはまる、2.どちらかというにあてはまる、3.どちらかというにあてはまらない、4.あてはまらない)の評定で構成されています。最もご自分にあてはまると思う箇所にチェックを入れてお答えください。第3群の質問は全部で9項目です。全て必須項目になります。

1.私はだいたいにおいて自分に満足している。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

2.自分は全くだめな人間だと思うことがある。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

3.私は色々な良い素質を持っている。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

4.私は物事を人並みにはうまくやれる。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

5.私には自慢できるところがあまりない。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

6.何かにつけて自分は役に立たない人間だと思う。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

7.もっと自分自身を尊敬できるようになりたい。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

8.私は敗北者だと思うことがよくある。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

9.自分に対して肯定的である。*

	1	2	3	4	
あてはまる	☐	☐	☐	☐	あてはまらない

お疲れ様でした。チェックでご回答頂く質問項目は以上になります。次頁からはあなたがご自身でご記入して頂く、記述式の質問になります。質問項目は7つです。回答の有無は自由ですが、差し支えがなければご協力をお願いいたします(次頁からの回答は必須ではありませんので、質問項目の内容を見てから回答しないというご選択も可能です)。*

- ☐ 記述式アンケートに回答する
- ☐ 記述式アンケートに回答しない

戻る

次へ

7/9 ページ

Google フォームでパスワードを送信しないでください。

第4群

1.あなたの性別を教えてください(あなたが思う限り自由にご記入ください)。

回答を入力

2.あなたがご自分の性別(例:「自分は〇〇という性を持った人間である」)について最も強く実感するのはどんな場面にいる時ですか？

回答を入力

3.あなたが「自分らしく生きることができている」と最も強く実感するのはどんな場面にいるときですか？

回答を入力

4.あなたがご自分の性別について初めて実感を持ったのはいつ頃ですか？また、それはどんな場面でしたか？(※ご自身の性別に実感が無い、実感が持てない、実感とは何かわからない、実感が薄い等の場合には無記入で結構です)

回答を入力

5.あなたがご自身の性別について初めて違和感をもったのはいつ頃ですか？また、それはどんな場面でしたか？(※ご自身の性別に違和感がない、違和感とは何かわからない、違和感が薄い等の場合には無記入で結構です)

回答を入力

6.あなたが生活の中でご家族、ご友人等の他の人と接する際に気を付けていること(例:「しっかりと目を見て話す」「相手の表情変化に注意している」など)があれば教えてください。

回答を入力

7.あなたが生活の中でご家族、ご友人等の他の人と接する際に気になること(例:「電話での会話がうまくいかないと感じる」「他の人の冗談が面白いと思えない」など)があれば教えてください。

回答を入力

戻る

次へ

8/9 ページ

Google フォーム でパスワードを記憶しないでください。

面接調査のお願い

最後に、本アンケート調査の集計後、第2調査としてインタビュー調査を実施したいと考えております。性別への実感や違和感について、また対人関係における姿勢・態度やその困難さについていくつかお尋ねするインタビューになります。インタビュー調査は1時間程度を予定しております。また私の都合により、首都圏でお会いできる方のみに限らせて頂ければと思っております。

皆様大変お忙しい中とは存じますが、インタビュー調査にご協力いただける方は、差し支えなければお名前(※インタビューの際に呼ばれたいお名前が結構です。本名でなくても構いませんし、フルネームを記載して頂く必要もございません)とご連絡先、お住まいを以下にご記入ください。

ご記入して下さった方にはご依頼のため、末尾に記載しておりますメールアドレスからご連絡を差し上げる場合がございます。Gmailからの受信が可能なご連絡先をご記入頂きますよう、お願い申し上げます。

お名前

回答を入力

ご連絡先

回答を入力

お住まい(都道府県等、可能な範囲で結構です)

回答を入力

アンケート調査は以上で全て終了になります。大変お疲れ様でした。沢山の質問項目にお答え下さり、誠にありがとうございました。

調査についてご質問やご不明点、結果の開示のご希望等ございましたら、以下のメールアドレスまでご連絡ください。

調査者:白百合女子大学 文学研究科 博士課程前期2年 脇優花(わきゆうか)
(E-mail)20th.century.371@gmail.com

戻る

送信

9/9 ページ

Google フォームでパスワードを送信しないでください。

性別に対するアイデンティティと個人の持つ特性に関するアンケート調査

回答を記録しました。ご協力誠にありがとうございました。

※Web アンケート実施のための使用ツール

Goole フォーム.<https://www.google.com/intl/ja/forms/about/>,

(2019 年 1 月 17 日取得)

要約

性別違和感を抱く人と自閉症スペクトラム障害との関連 —ジェンダーアイデンティティに関する TEM を用いた検討—

問題と目的

ジェンダーアイデンティティとは、「斉一性・連続性をもった主観的な自分の性別が、まわりからみられている社会的な自分の性別と一致するという感覚」(佐々木・尾崎,2007)として定義する(佐々木・尾崎,2007)。また性別違和感とは「出生時に指定された戸籍上の性に対して、一貫した同一感を持たない状態」(吉川,2018)として定義する。性別違和感を抱える人は、希死念慮をはじめとする様々な危機に直面する。DSM-5に「一般集団と比べて性別違和感をもつ子どもおよび青年において、自閉症スペクトラム障害の有病率がより高い」との記述があるように、欧米では性別違和感と ASD(Autism Spectrum Disorder)との関連についての研究がされてきている(de Vries,2010 ほか)が、日本では明らかにされていない。精神分析学において、ASD はその障害特性から自我同一性の確立に困難をきたすとされているが、この自我同一性の基盤のなさが性同一性の問題に展開する(木部,2016)ことも示唆されている。本研究では、まず研究Ⅰとして、ASD とジェンダーアイデンティティ、またジェンダーアイデンティティと関連して不適応を引き起こすと予想されている(松木,1997 ほか)自尊感情との関連を調査することを目的とする。研究Ⅱとして、研究Ⅰにて分類された ASD 群と非 ASD 群から 1 名ずつ抽出し半構造化面接を実施して、ジェンダーアイデンティティの形成過程を描いた TEM 図を作成することで両群の比較・検討を行うことを目的とする。

【研究Ⅰ】

方法

当事者コミュニティおよび SNS にて Web アンケートを公開したところ、104 名の回答が得られた。アンケートでは①AQJ(Autism-Spectrum Quotient Japanese version:日本語版自閉症スペクトラム指数),②GIS(Gender Identity Scale:ジェンダーアイデンティティ尺度),③ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版,④記述式質問項目,⑤面接調査のお願いを記載した。

結果

AQJ 得点において規定値であるカットオフ値 33 点として ASD 群・非 ASD 群に分類した。ASD 群は非 ASD 群よりも有意に AQJ 得点および自尊感情得点が低かった。また AQJ と GIS, AQJ と自尊感情の間に負の相関, GIS と自尊感情の間に正の相関が見られた。

考察

ASD 者の中には無作為抽出された集団よりも性別違和を抱える者が比較的多く含まれるという可能性が示唆された。また ASD の特性が強くなるほど自我同一性の不確立からジェンダーアイデンティティも不確実になることが推察された。更に ASD の特性が強くなるほど自尊感情が低くなることから, ASD 者は障害特性が引き起こす孤独感や不適応感から自尊感情が低下すると推察された。ジェンダーアイデンティティが確立すると自尊感情が高くなることについて, 自身の性別について安定した感覚を持っていることが, 高い自己肯定感につながることを示唆された。

【研究Ⅱ】

方法

ASD 群・非 ASD 群から, 個人の AQJ 得点の高い／低い者, GIS 得点が群内平均程度以上ある者をそれぞれ 1 名ずつ抽出し半構造化面接を行った。協力者 A は 20 代の X ジェンダー(sex は女性), 協力者 B は 50 代の X ジェンダー(sex は男性)であった(X ジェンダーとは, 出生時に指定された戸籍上の性別のいずれかに二分された性別の自覚を持たない者を指す)。分析方法には TEM(複線経路等至性モデル)を採用し, 両者の等至点(類似した体験・行為)に着目した。

結果

協力者 A は, A は自身が ASD であると自覚してから, 自分を説明する枠ができたことでより自己理解を深めたいと思うようになった。性別に関しては男女の両極に偏らず, 自分は「A(本人の名前)」という性を持った人間であると語った。協力者 B は, 異性との交際に伴い自身の女性性を抑圧したことや, 社会的男性像のプレッシャーにより不適応状態に陥り, ジェンダークリニックにて性同一性障害の診断を受けたことが語られた。性別に関しては, 本質的には女性であるが, 長年に渡って染み付いた男性性が殻のように女性性を覆っている状態であると語った。

考察

A は自身を ASD であると自覚したことから恥や罪悪感といった社会的感情が発露し、自己概念が芽生えた結果、自分は「A」であるというジェンダーアイデンティティを獲得したという過程が考えられた。また B は、性別への違和感を社会的男性像に過剰適応してしまったことにより不適応を起こしていたが、ジェンダークリニックを受診し自己の内面や過去と向き合った結果自己への理解や自分らしさの模索により深みが増した。両者とも自身への理解が進むと共に周囲にも理解や許容を求めて働きかけた結果、同一性の感覚において重要とされる「自己斉一性・連続性」と「対他的同一性」(谷,2001)を獲得したと考えられる。したがって、ASD 傾向の有無に関わらず違和感に伴う自身の困難さを自分や周囲の人々の中で理解し受容していく過程が重要となるといえるだろう。

総括

ライフストーリー上で不適応感に基づく幾多の困難に直面することが予想される ASD と性別違和感を、一方、場合によっては双方とも抱える当事者に対して、どのように理解していけばよいのか、どのような介入をしていけばよいのか、なにが彼・彼女らにとって最も困難で、最も目指すべき“その人らしさ”なのか、ということを心理臨床家は常に念頭に置いておくべきなのであると考える。またジェンダーアイデンティティの確立のため、多くの人々が性別の違和感を受容できる社会を形作ることも心理臨床家の担うべき役割の一つであるといえる。

謝辞

修士論文の研究・執筆に当たり、手厚いご指導を賜りました白百合女子大学教授木部則雄先生に心より御礼申し上げます。併せまして、木部先生には多大なるご心労をおかけ致しましたこと、大変申し訳なく思っております。また、本研究に関して貴重なご助言を頂きました SMCS の宮腰辰男先生、長野香先生には、AGP の交流会におきましても昨年度より大変お世話になりました。誠に有難うございました。Web アンケート調査の実施に当たりご協力頂きました、label X 代表の藤原和希様をはじめとする責任者スタッフの皆様ならびに label X 会員の皆様、アンケートの内容の確認とご指摘を賜りました遠藤まめた様、アンケートの拡散や回答にご協力くださった SNS ユーザー(Twitter, Facebook)の皆様にも、深く感謝の念を申し上げます。さらに、インタビュー調査の実施に当たり、ご協力頂きましたお二方にも心より御礼申し上げます。年末のお忙しい中、貴重な時間を割いて快くインタビューをお受け頂きまして、誠に有難うございました。最後に、執筆期間中、分析への協力や精神面でも支えになってくれた同期の佐藤寛子さんにも感謝の念を申し上げます。